

熊本県文化財調査報告第 316 集

健軍神社周辺遺跡群

2015.3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第316集

健軍神社周辺遺跡群

2015.3

熊本県教育委員会

序文

熊本県教育委員会は、陸上自衛隊健軍駐屯地内発電機室及び地下燃料タンク新設に伴い、熊本市東区東町1丁目1-1において埋蔵文化財の調査を実施してまいりました。

調査の結果、縄文時代の遺物と中世の溝を確認し、健軍神社周辺遺跡に内包される健軍上ノ原遺跡の縄文後期後半から晩期前半の遺跡の広がりなど、この地域の様相を明らかにする資料を得ることができました。

今回の調査によって出土した遺構、遺物により、その当時の人々の生活の様子的一端を知ることができた反面、地下に保存されていた貴重な遺構等が姿を消し、図面や写真等での記録保存となりました。

この報告が今までの周辺の調査や、今後調査される発掘資料と併せて、この地域の歴史の資料の一つとして活用され、皆様の埋蔵文化財に対する理解と保護のために役立てれば幸いに存じます。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大のご協力をいただきました陸上自衛隊西部方面総監部、熊本防衛施設支局、陸上自衛隊健軍駐屯地業務隊管理課営繕班、熊本市教育委員会及び地元の関係者、またご指導・ご助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成27年3月31日

熊本県教育長 田崎 龍一

例言

- 1 本書は、陸上自衛隊健康駐屯地内発電機室及び地下燃料タンク新設に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、上記工事に伴い、熊本県熊本市東区東町に所在する熊本防衛支局の依頼を受けて熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、全額熊本防衛支局が負担した。
- 3 現地調査は、平成26年7月14日～9月5日に実施し、水上正孝が担当した。現地での写真撮影、図面作成は水上・松浦由佳が行った。
- 4 世界測地系での測量基準杭の設定は、株式会社イビソクに委託した。
- 5 整理作業、報告書作成は、熊本県文化財資料室において実施した。
- 6 出土遺物の整理作業は、前田佳代子・高瀬美智代が担当した。
- 7 遺構トレースは、松浦由佳・前田・高瀬が行った。
- 8 遺物実測、トレースは、坂本貴美子・立石美代子・結城あけみが行い、一部を有明測量株式会社に委託した。
- 9 出土遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・蓮池千恵が行い、坂本・立石が補助した。
- 10 本書の執筆は、第1章第3節を松浦、その他の執筆を水上が行い、文化財資料室長後藤克弘の指導のもとに編集を行った。編集で前田・高瀬が補助した。
- 11 遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目1667）に保管している。
- 12 本書中での人名はすべて敬称を省略させて頂いた。

凡例

- 1 発掘遺構は遺構の種類を示す以下の記号と一連の番号の組み合わせにより表記した。
SA：塙、柵列 SB：建物 SC：回廊 SD：溝 SE：井戸 SF：道路 SG：池
S1：堅穴建物 SK：土坑 SP：柱穴 SS：足場 ST：墓 SX：その他、不明遺構等
(本書で使用していない記号も含んでいる)
- 2 遺構名称は、区の名称の後に遺構記号と番号で表記した。以下の注意点がある。
 - (1) 調査全体をとおして、一度遺構番号を付けたものの、調査の過程において遺構と認められないと判断した番号については空き番としている。そのため遺構名称の最後の番号が、調査区でのその遺構の出土数とは限らない。
- 3 現地における土層、遺物(土器類)の色調表記は「新版標準土色帖 2004年版」(小山正忠・竹原秀雄編著)に基づく。
- 4 本書で使用している方位は、座標北を示す。
- 5 本書に掲載した地図、遺構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。
- 6 出土遺物実測図において以下の注意点がある。
 - (1) 縮尺は土器類が3分の1、3分の1で収まらない遺物については図に明記した。
 - (2) 出土遺物の実測図において、須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。
 - (3) 赤彩及び黒色土器Aについては、実測図には表記せず、観察表に表記した。
 - (4) 土師器裏等の内面の調整で、ヘラケズリは矢印で方向を示した

本文目次

序文	
例言・凡例	
目次	

第1章 序章

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 これまでの予備調査結果とその考察	2
第4節 発掘調査の経過	15

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	19
第2節 歴史的環境	19

第3章 調査の方法

第1節 調査区・グリッド設定	27
第2節 調査方法	27
第3節 基本層位	30

第4章 調査の成果

第1節 遺構	31
第2節 遺物	35
第3節 遺物観察表	41

第5章 まとめ

写真図版	
あとがき	
報告書抄録	

挿図目次

- 第1図 陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ配置図
- 第2図 平成10年、11年陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図
- 第3図 平成13年陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図
- 第4図 平成14年、15年陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図
- 第5図 平成15年陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図
- 第6図 平成17年、18年、21年陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図
- 第7図 平成25年陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図
- 第8図 駐屯地内掘削深度模式図1
- 第9図 駐屯地内掘削深度模式図2
- 第10図 駐屯地内掘削深度模式図3
- 第11図 健軍神社周辺遺跡群周辺遺跡地図
- 第12図 遺跡内調査地点図
- 第13図 陸上自衛隊健軍駐屯地内調査区グリッド設定図
- 第14図 陸上自衛隊健軍駐屯地内主要遺構配置図 (1/100)
- 第15図 全調査区土層断面図及び土層注記
- 第16図 調査区土層柱状図
- 第17図 S D 1、S D 2 平面・断面図
- 第18図 S K 1、S K 7 平面・断面図
- 第19図 S K 3・4・5・6・9・10・11 平面・断面図
- 第20図 遺構内出土遺物実測図
- 第21図 調査区遺物全点上げ分布図
- 第22図 調査区内出土土器実測図
- 第23図 調査区内出土石器実測図1
- 第24図 調査区内出土石器実測図2
- 第25図 調査区グリッド内出土遺物実測図
- 第26図 周辺調査地点図

表目次

- 第1表 陸上自衛隊健軍駐屯地内予備調査トレンチ状況一覧表
- 第2表 健軍神社周辺遺跡群一覧
- 第3表 健軍神社周辺遺跡群内調査地一覧
- 第4表 遺物観察表

写真目次

- 図版1 調査区完掘状況
SD1 完掘状況
- 図版2 SD2 完掘状況
SK1 完掘状況
- 図版3 SK7 完掘状況
調査区東側土層断面
- 図版4 縄文土器出土状況
石器出土状況
- 図版5 縄文土器 (1)
縄文土器 (2)
- 図版6 出土石器 (石鏃・楔)
出土石器 (二次加工・剥片)
- 図版7 出土石器 (石皿)
古代出土遺物

第1章 序章

本書は、陸上自衛隊健軍駐屯地内発電機室、地下燃料タンク新設に伴い、熊本県熊本市東区東町1丁目1-1に所在する「健軍神社周辺遺跡群」を熊本県教育委員会が2014年（平成26年）に発掘調査し、その成果を取りまとめたものである。

健軍神社周辺遺跡群の所在する託麻原台地は、広大な洪積台地であり、阿蘇外輪山の一つである依山から南西に緩やかに伸びている。この台地は、北は白川、南は加勢川の支流・秋津川によって分断されており、白川沿岸においては河岸段丘が発達している。台地の西～南西部は小崖上をなしており、崖線に沿って水前寺公園や江津湖などの豊かな湧水点が並んでいる。

健軍神社周辺遺跡群は、この託麻原台地の南西部に位置する。

第1節 調査に至る経緯

陸上自衛隊健軍駐屯地は、周知の埋蔵文化財である健軍神社周辺遺跡群の隣接地にあたる。当該地における発電機室、地下燃料タンク新設に伴い、平成25年5月29日、陸上自衛隊熊本防衛支局より埋蔵文化財の予備調査依頼が熊本県教育委員会文化課に提出された。これを受け、文化課は平成25年6月18日に予備調査を実施した。結果、T-1で現地表面下約160cmにおいて古代の土師器片が出土し、T-2で道路状遺構とそれに伴う硬化面を確認したことから、遺構の残存が確認された。よって、陸上自衛隊健軍駐屯地と文化課の間で協議し、工事によって遺跡が破壊される区域について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の組織

【平成25年度（2013）予備調査】

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	小田信也（文化課長） 西住欣一郎（課長補佐）
調査統括	村崎孝宏（主幹兼文化財調査第1係長）
調査事務局	馬場一也（課長補佐） 広石啓哉（主幹兼文化・総務係長） 有馬綾子（参事） 天草英子（主任主事）
調査担当	亀田 学（参事） 水上正孝（文化財保護主事）

【平成26年度（2014）本調査及び整理作業・報告書作成】

調査・整理主体	熊本県教育委員会
調査・整理責任者	手島伸介（文化課長） 西住欣一郎（課長補佐）
調査統括	村崎孝宏（主幹兼文化財調査第1係長）
整理統括	後藤克弘（参事兼文化財資料室長）
調査事務局	松永隆剛（課長補佐） 広石啓哉（主幹兼総務・文化係長） 有馬綾子（参事） 天草英子（主任主事）
調査担当	水上正孝（文化財保護主事） 松浦由佳（非常勤嘱託職員）
整理担当	水上正孝（文化財保護主事） 前田佳代子、高瀬美智代（非常勤嘱託職員）

調査助言・指導及び調査協力者

陸上自衛隊健軍駐屯地、熊本防衛支局、熊本市教育委員会

調査・整理に伴う業務委託先

4級基準点測量及びメッシュ杭設置業務

株式会社イビソク

出土遺物実測及びデジタルトレース業務（一部）

有明測量株式会社

第3節 これまでの予備調査結果とその考察

平成26年度の調査は、防衛省陸上自衛隊健軍駐屯地内の施設建設に伴って実施した。調査区は、健軍駐屯地内の西地区南西部に位置し、平成15年度に調査された健軍藤原遺跡の300m程南に位置している。

近年の立地環境

1954年より現在の位置に陸上自衛隊健軍駐屯地が設置される以前、昭和初頭の健軍周辺地域は耕作地であった。昭和17年（1942）から現在の熊本市東区東町周辺には三菱重工業熊本航空機製作所などが建設されはじめ、翌年には三菱重工業附属の健軍飛行場が現在の熊本県立大学周辺に、附属三菱青年学校が現在の税務大学校熊本研修所周辺に開校した。それに伴い周辺には社宅・寮などが建ち並び、引き込み線路なども敷設されている。昭和20年（1945）に終戦をむかえと附属三菱青年学校は廃校し、昭和23年（1948）には三菱工場跡に中央紡織が創業した。1945年に廃校した附属三菱青年学校の跡地には、昭和24年（1949）井関農機熊本工場が創業し、後に1950年に井関農機熊本工場の一部を国が買収すると、そこに昭和25年（1950）現在の自衛隊の前身である警察予備隊熊本支隊が発足し、昭和29年（1954）に陸上自衛隊健軍駐屯地が配置されている。

予備調査

【平成10年】（第2図参照）

調査場所：H10-1～7トレンチ 健軍駐屯地西地区中央周辺

H10-8～12トレンチ 健軍駐屯地東地区南西周辺 計12ヶ所

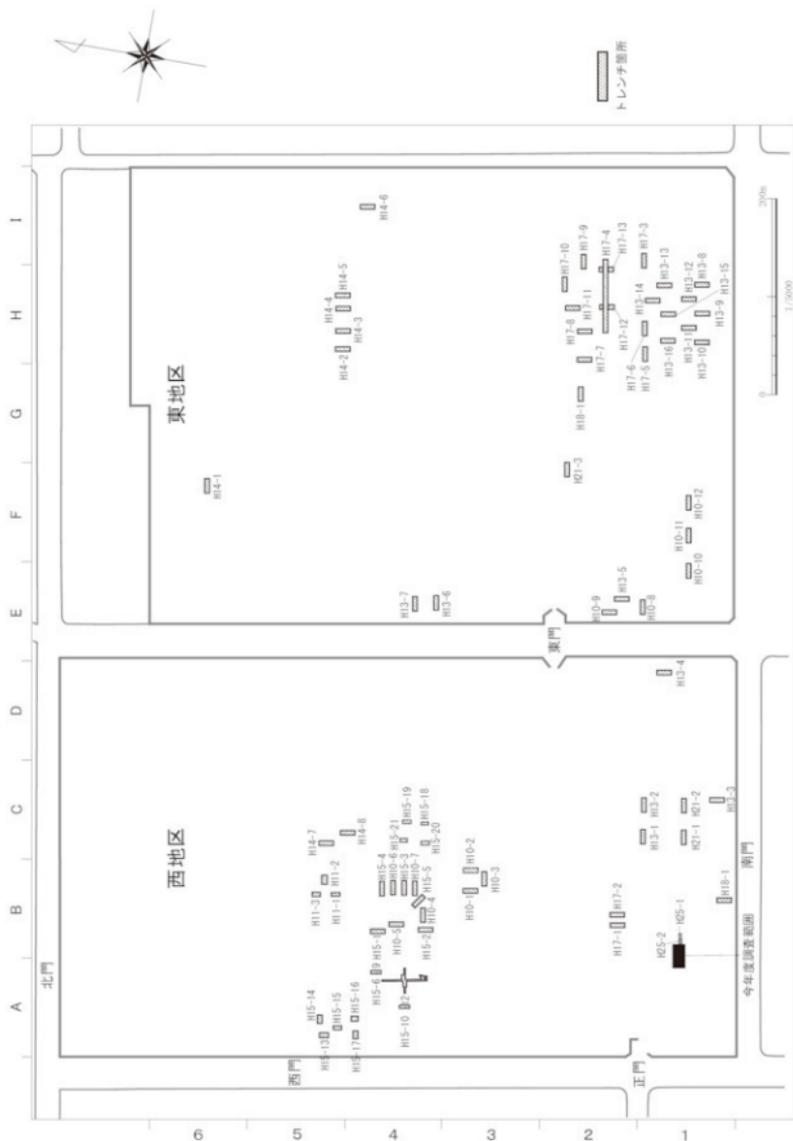
調査結果：H10-1～7トレンチについては、地表面から約-10cm、深い部分で-150cm程度整地されており、以下、黒色土・暗褐色粘質土・ニガ土・ローム層が堆積している。

H10-8～12については、地表面から約-10～-20cm程度整地されているが、以下は直ぐに黄褐色粘質のローム層が堆積しており、両調査場所とも遺物・遺構は確認されていない。

【平成11年】（第2図参照）

調査場所：H11-1～3トレンチ 駐屯地西地区中央 計3ヶ所

調査結果：H11-2・3トレンチでは、現地表面から約-60cm付近まで客土が混入しており、以下茶白色粘性土が堆積するが、H11-1トレンチでは、客土と茶白色粘性土の間に黒褐色土（ニガ土）の堆積が確認されているため、H11-2及びH11-3トレンチ付近では客土を敷き、整地等をした際に黒褐色土（ニガ土）が消失したと思われる。計3ヶ所ともに、遺構・遺物は確認されていない。

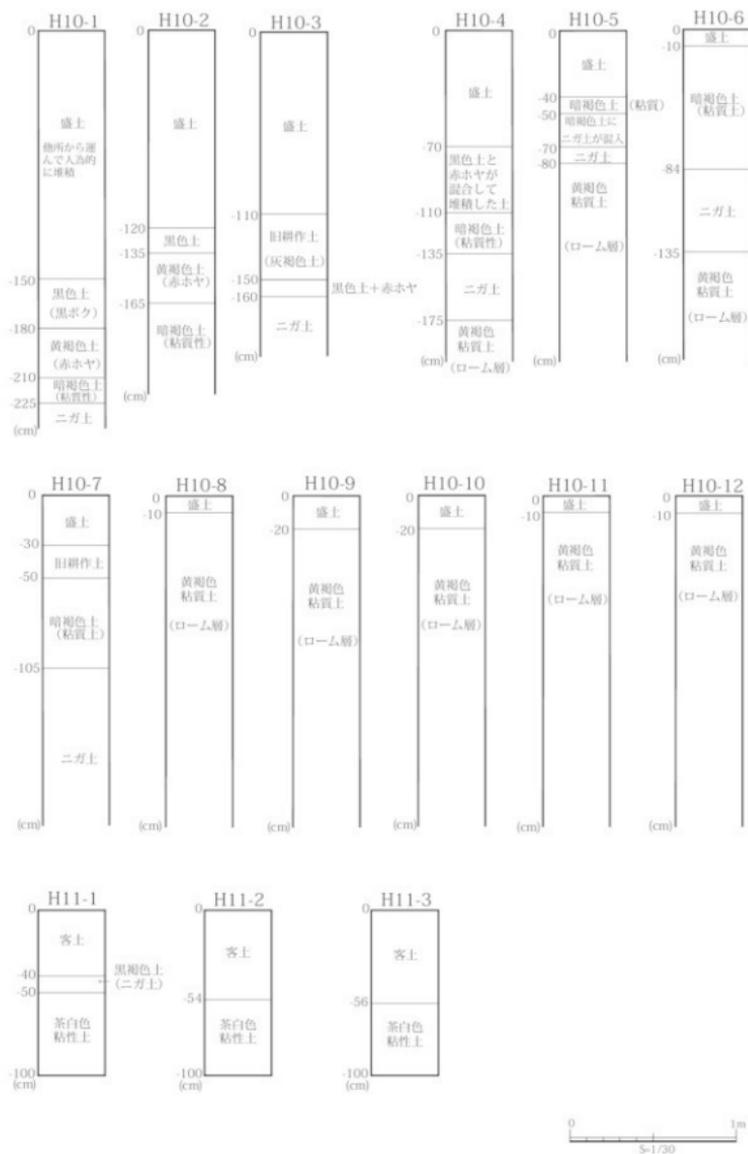


第1図 陸上自衛隊健康駐屯地内試掘トレンチ配置図

第1章 序章

第1表 勝上白鹿保健福祉院内子掘調査トレンチ状況一覧表

試掘実施年	トレンチNo.	掘削深度 (cm)	遺物・遺構の有無	遺物・遺構の確認面までの深さ	遺物・遺構の内容		遺跡名
					(遺物)	(遺構)	
平成10年	1	240	×				
	2	220	×				
	3	196	×				
	4	200	×				
	5	200	×				
	6	200	×				
	7	200	×				
	8	200	×				
	9	200	×				
	10	200	×				
	11	200	×				
	12	200	×				
平成11年	1	100	×				
	2	100	×				
	3	100	×				
平成13年	1	256	×				
	2	110	×				
	3	120	×				
	4	208	×				
	5	90	×				
	6	40	×				
	7	46	×				
	8	258	×				
	9	268	×				
	10	168	×				
	11	288	×				
	12	274	×				
	13	406	×				
	14	376	×				
	15	386	×				
	16	288	×				
平成14年	1	280	×				
	2	320	×				
	3	300	×				
	4	260	×				
	5	218	×				
	6	248	×				
	7	190	×				
	8	210	×				
平成15年	1	150	○	10～30 (瓦片)	土器片、陶磁器片	健康福祉通所	
	2	153	○	10～40 (瓦片)	陶磁器片		
	3	92	○	10～40 (瓦片)、80	陶磁器片、土器片 木目瓦	古代の溝	
	4	113	×				
	5	90	○	10～70 (瓦片)、80	土器片、陶磁器片	古代の溝	
	6	42	×				
	7	90	×				
	8	90	○	40 (遺構)	縄文晩期土器	ビット	
	9	90	○	40 (遺構)		不明遺構	
	10	102	×				
	11	91	○	40 (遺構)			
	12	35	×				
	13	90	×				
	14	230	×				
	15	61	×				
	16	137	×				
	17	134	○	63 (遺構)		土坑	
	18	190	×				
	19	275	○	259	目石溝		
	20	210	×				
21	240	×					
平成17年	1	280	×				
	2	80	×				
	3	80	×				
	4	90	×				
	4a	100	×				
	4b	160	×				
	4c	120	×				
	5	140	×				
	6	140	×				
	7	120	×				
	8	120	×				
	9	220	×				
	10	140	×				
11	80	×					
12	100	×					
13	80	×					
平成18年	1	90	×				
	2	258	×				
	3	214	×				
4	178	×					
平成21年	1	218	×				
	2	200	×				
	3	180	×				
平成25年	1	300	○	160	土器器	健康福祉通所 白鹿通所	
	2	180	○	140			



第2図 平成10年、11年 陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図

【平成13年】(第3図参照)

調査場所: H13-1~3トレンチ 駐屯地西地区南側

H13-4~7トレンチ 駐屯地西地区東端・東地区西端

H13-8~16トレンチ 駐屯地東地区南東端周辺 計16ヶ所

調査結果: 地表面から約40cmは整地されており、以下、最も深い部分では-240cm付近までカクランが入り込んでいる。H13-2・3トレンチについては、同様に-60~-90cm程度整地・カクランが入り込んでいるものの、約100cm付近から淡黄褐色土層が残存している状況にある。

H13-4トレンチ(西地区東端)、H13-5トレンチ(東地区西端)、両トレンチについては、地表面より約-70cm付近まで整地されている。また、H13-6~7トレンチは、以下、淡黄褐色土が整地された層下より堆積するが、H13-4・5トレンチ付近は、整地された層と淡黄褐色土層の間に黒褐色土・暗褐色土層の堆積がみられる。

H13-8~12トレンチは、東地区南東に位置するトレンチで、最も深い部分で地表面より約-390cm付近まで整地・カクランを受け、以下、淡黄褐色土が堆積する。

試掘調査を以上3エリア16ヶ所で行っているが、いずれからも遺物・遺構は確認されていない。

【平成14年】(第4図参照)

調査場所: H14-1~6トレンチ 駐屯地東地区北方面

H14-7~8トレンチ 駐屯地西地区北方面 計8ヶ所

調査結果: H14-1~6トレンチは、最も深い部分で地表面から-180cm付近まで客土が入り、整地されている。以下、黄色の粘質土、部分的にローム・火山灰風土が堆積する。

H14-7・8トレンチは、地表面から-50~-120cm程まで客土が入り込み、下層はローム層が堆積する。

【平成15年】(第5図参照)

調査場所: 駐屯地西地区中央(健康藤原遺跡周辺) 計21ヶ所

調査結果: 地表面より-6cm程は現代表土層で、最も深い部分で-80cm付近までカクランが入り込んでいる。

H15-1~3・5・8・9・17・19トレンチから遺物・遺構を確認している。

H15-1~3・5の遺物に関してはいずれもカクラン層より時期不明の土器片と陶磁器片を確認し、遺構は、カクラン層下のニガ土が堆積している層に溝の掘り込みを確認している。

H15-8・10・11・17トレンチについては、現地表面から約-40cm~-60cm付近にかけて堆積している黒ニガ及びニガ層に土坑、溝状遺構の掘り込みを確認し、いずれも遺物は確認されていない。

H15-19トレンチは、遺物のみ確認しており、現地表面から-259cm地点の暗褐色土の堆積層に原石から剥離させる際の打点・打面が残存する剥片を1点確認している。

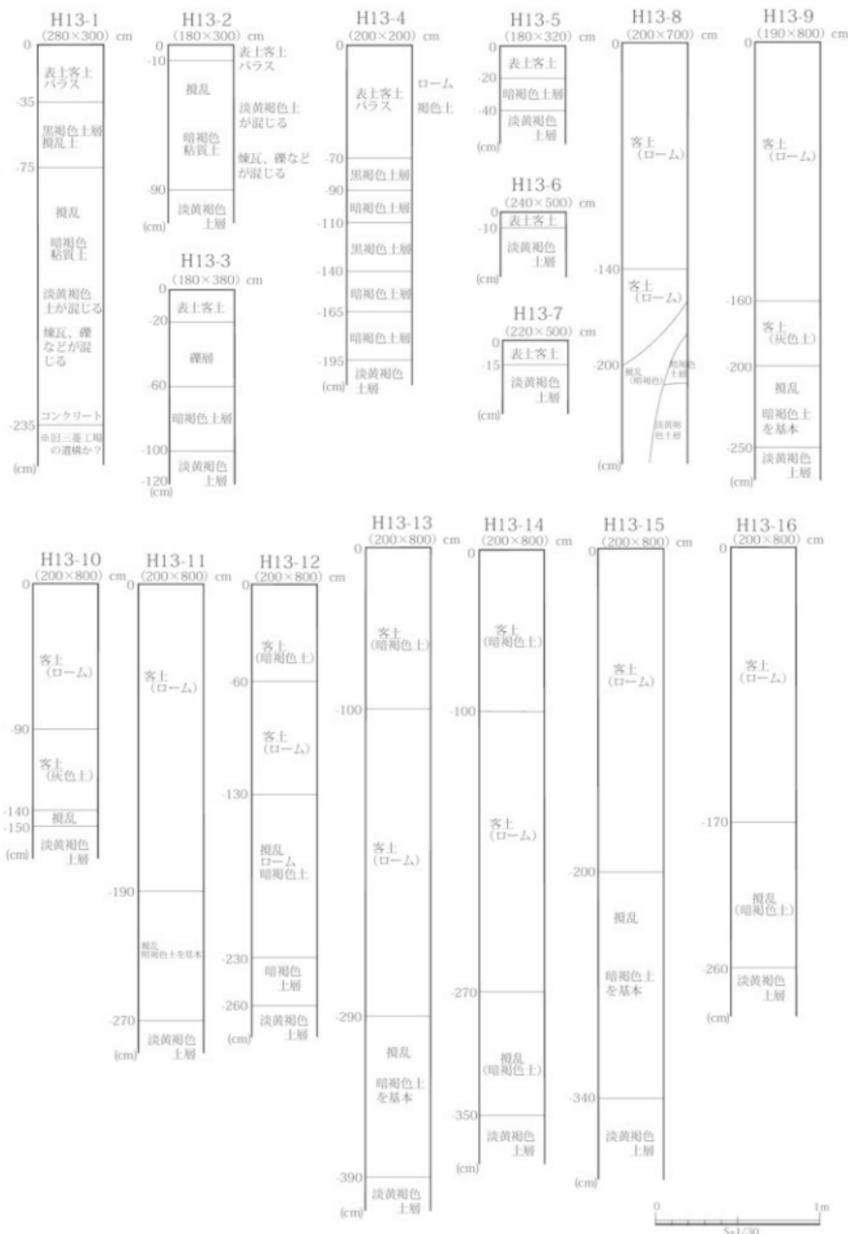
【平成17年】(第6図参照)

調査場所: H17-1・2トレンチ 駐屯地西地区南側

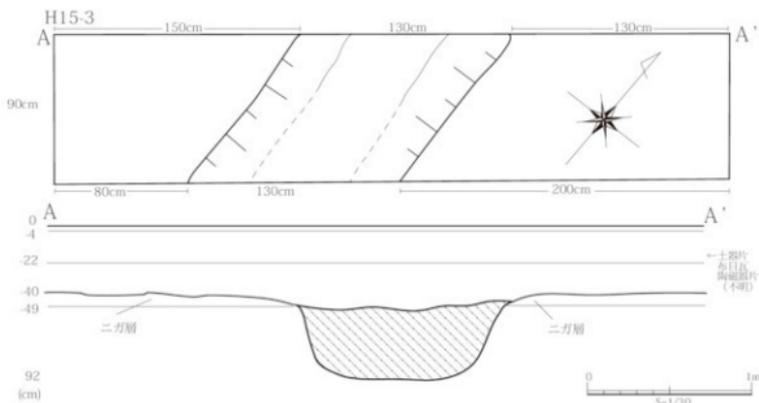
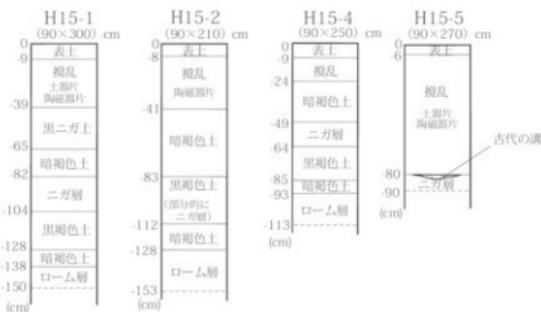
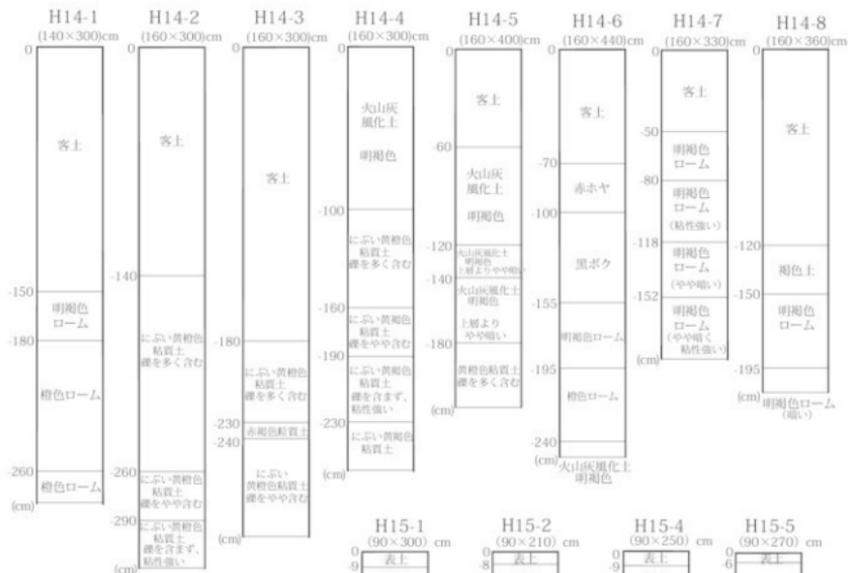
H17-3~13トレンチ 駐屯地東地区南東付近 計13ヶ所

調査結果: H17-1・2トレンチは、現地表面より約-15cmまで表土層で、以下は客土が入り整地されている。

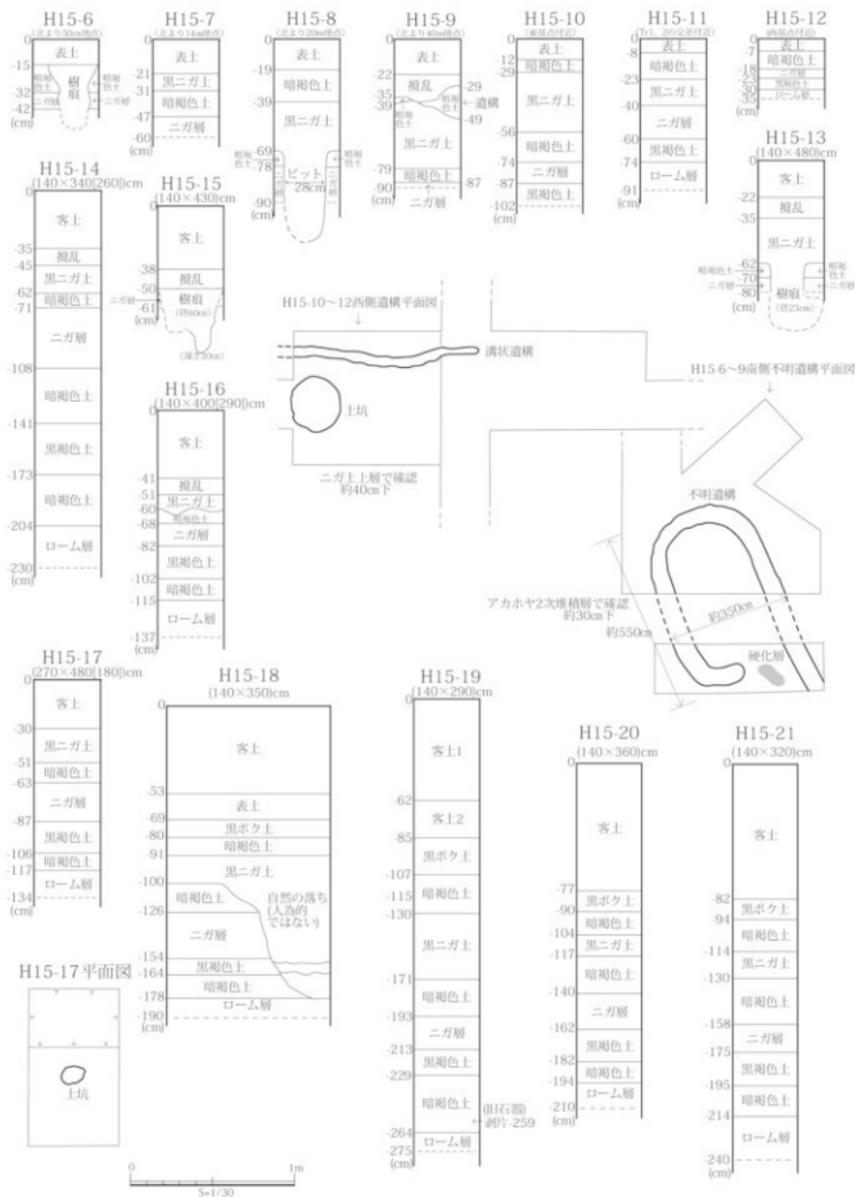
H17-3~13トレンチは最も深い部分で地表面から-134cm客土が入り整地されている。以下は、ローム・火砕流の2層の堆積で構成されている。いずれのトレンチからも、遺物・遺構は確認されていない。



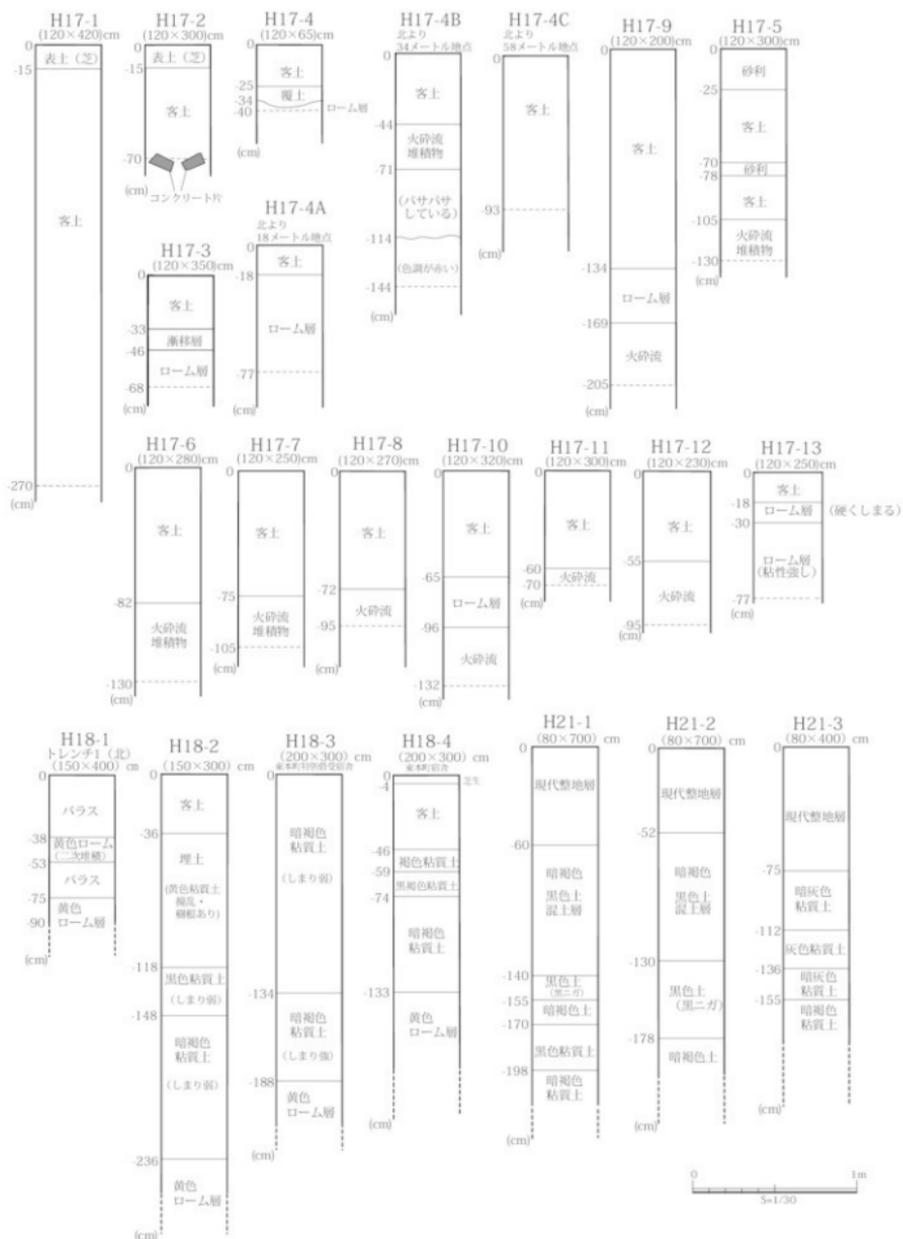
第3図 平成13年 陸上自衛隊健康軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図



第4図 平成14年、15年 陸上自衛隊陸軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図

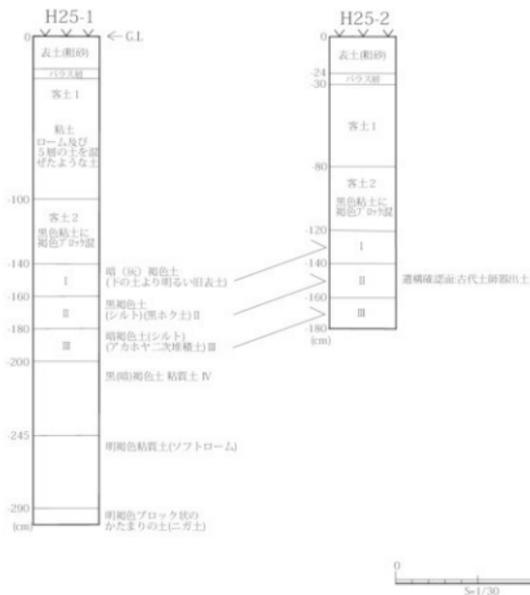
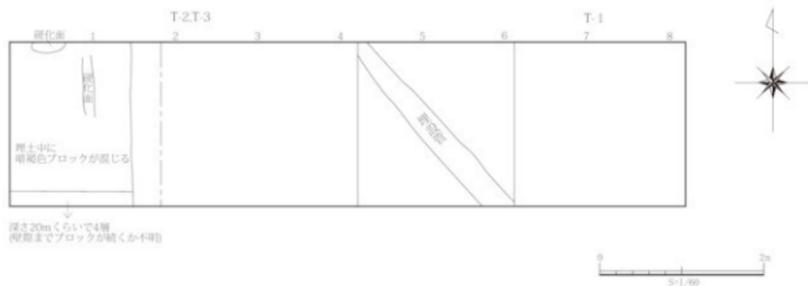


第5図 平成15年 陸上自衛隊健康駐屯地内試掘トレンチ平面・柱状図



第6図 平成17年、18年、21年 陸上自衛隊隊軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図

トレンチ平面略図



第7図 平成25年 陸上自衛隊健軍駐屯地内試掘トレンチ柱状図

【平成18年】(第6図参照)

調査場所：H18-1 トレンチ 駐屯地東地区南東周辺

H18-2 トレンチ 駐屯地西地区南端

H18-3 トレンチ 駐屯地敷地外 (東本町特別借受宿舎)

H18-4 トレンチ 駐屯地敷地外 (東本町宿舎) 計4ヶ所

調査結果：H18-1 トレンチは、現地表面直下はバラスで整地されているが、地表面より約-75cm付近から、黄色ローム層が続く。

H18-2 トレンチは、現地表面から-118cm付近まで整地され、以下、黒色粘質土・暗褐色粘質土が堆積し、-236cm程から黄色ロームの堆積が続く。いずれのトレンチからも遺構・遺物は確認されていない。

【平成21年】(第6図参照)

調査場所：H21-1・2 トレンチ 駐屯地西地区南端

H21-3 トレンチ 駐屯地東地区中央付近 計3ヶ所

調査結果：H21-1・2 トレンチ付近では、現地表面から約-60cm整地されており、以下、暗褐色黒色混土層・黒色土・暗褐色土が堆積している。

H21-3 トレンチは、現地表面から-75cm付近まで整地され、以下、粘質の土層が堆積している。西地区南端のトレンチ2カ所、東地区中央のトレンチのいずれからも、遺構・遺物は確認されていない。

【平成25年】(第7図参照)

調査場所：駐屯地西地区南西付近 計2ヶ所

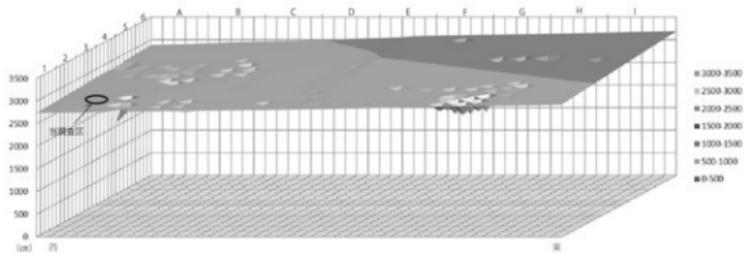
調査結果：現地表面から約-140cmまで客土が入っており、以下、旧表土層(暗灰褐色土)と思われる部分から残存している。西側で記録した

H25-2 トレンチでは、旧表土層下の2層より古代土師器が確認でき、その他、硬化面を部分的に確認している。

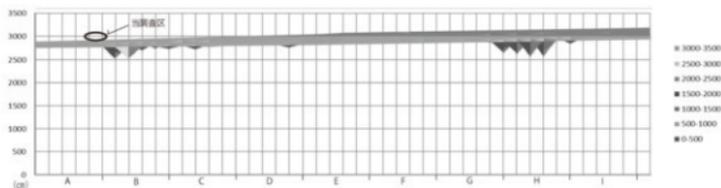
予備調査まとめ

本調査区及び予備調査の結果を踏まえ、駐屯地内とその周辺は、戦前・後の土地利用により広範囲を削平されていると予想されるため、現時点で、駐屯地内の現地表面からどの程度掘削・整地されているのか模式図化した。

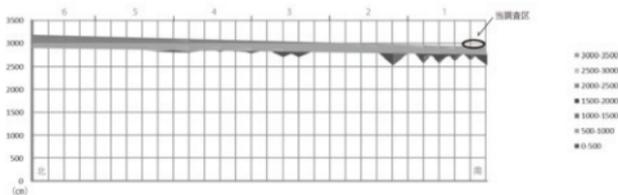
(試掘調査時の記録に表土・盛土・客土・カクランと表記されている部分の最大深度から、整地・掘削により失われている部分を図化している。)



第8図 駐屯地内掘削深度模式図1



第9図 駐屯地内掘削深度模式図2 (南方向から)



第10図 駐屯地内掘削深度模式図3 (西方向から)

近現代の掘削により消失した層

試掘調査を行っている部分のみ図として反映しているため、駐屯地内のその他のエリアでどの程度掘削されているのかについては、不明であるが、試掘調査の結果から、東南端のエリアで最大深度-350cm付近まで掘削され、西側では、当調査区周辺エリア（西南端）で、最大深度-270cm程度掘削をされている。比較的掘削されていないと思われるエリアを検討すると、北方向に当たり、模式図の南北軸（4～6）側にかけての平均掘削深度約-101cm、（3～1）側の平均深度約-145cmと比較しても、北方向にかけては、さほど掘削されていないと判断できる。判断材料が希薄ではあるものの、以上から、駐屯地内では南方向、中でも東方に向かうにしたがって約-100cm～-400cmの掘削を受けていると予想される。

また、上記の掘削・整地により上層に存在した可能性がある包含層などは消失しており、それ以下の残存している層についても、カクランの影響などからあまり良好ではなく、改めて遺物・遺構等が確認された以下3つのエリア（①試掘調査によって遺構を確認したエリア、②健軍藤原遺跡の調査エリア、③当調査区）から検討しても、

- ① 試掘調査により、遺物・遺構を確認したエリアは、西区北側に位置しているため比較的掘削を受けていないエリアであるが、遺物はカクラン層から時期不明の土器片と陶磁器片、現地表面から約-259cm付近の暗褐色土層中から剥片が1点確認されている。遺構も確認しているが、カクラン層直下に位置しているものは、上面をかなり削られている状態であり、古代の溝が約-80cm付近に確認されている。その他、土坑、溝状遺構に関しては、約-50cm付近に掘り込みが確認されている。（平成15年度予備調査より）
- ② 健軍藤原遺跡の土層堆積は、現地表面から-60cm程度まで近現代の整地層で構成されており、古代～現代にかけての遺物が混在した状態でこの層内に含まれるため、標高28.0m付近までは現代のカクランが入り込んでいる。また、遺構は、計10基確認されており、カクラン層直下の層に掘り込まれている。埋土の状況などから、縄文後晩期、比較的新しいもので、古代及び中世にかけての遺構と判断されているが、性格が不明なものも多い。（平成15年度本調査より）
- ③ 当調査は、基本土層でも前述したように、削平やカクランの入り込みがある為、土層残存状況は良好とは言いが、標高26.0m～25.5m付近（深度約-250cm）にかけ石器・縄文土器等を含んでいる。

以上3ヶ所からみても、南側に向かって掘削が深くなっており、北側の比較的削平されていないエリアでは、古代及びそれ以前の層などが、部分的に残存しているものと予想されるが、当調査区付近から東側にかけてのエリアについては、近現代の施設建設及び解体によって削平・整地され消失している可能性が高いと考えられる。

第4節 発掘調査の経過

現地調査は、平成26年7月14日～9月5日の日程で実施した。その間の経過は以下のとおりである。
(調査日誌より抜粋)

調査日誌

【平成26年(2014年)】

7月14日 調査区の表土剥ぎ開始。-150cmまではほぼカクランであり、-160cmくらいから暗褐色の土が出る。最初-170cmで止めていたが、地山(褐色土より淡い土と思われる)まで下げるのは困難であると考え、-200cmまで落とす。埋設管、昔の浄化槽などが残っていて、壊しているのか不明の状態のものもある。浄化槽は、天端から-250cm程まで埋まっている状態らしく、遺構を壊している可能性が高い。作業中に、古代から中世のものと思われる遺物(土師器1点、土人形(顔)1点、土器片1点)が出土した。調査区外へスロープが作れないため、調査区内に土のうを置き上に道板を敷いてスロープとするやり方しかないようなので、土のうを400袋程作成。

7月15日 雨の確立70%のため作業員は休み。午後には晴れたので、表土剥ぎは昨日と同様黒褐色土層で止める。黒褐色土層が遺物包含層である。土師器が多いが、白い磁器も数点出土する。西側土層の深くに黒褐色土層があり、また厚みがあるため、掘り足りない感じもする。地山と思われる色の抜けた褐色土層がはっきりしない。東側の黒褐色土層は西側程厚みはないようである。ただ、比較的黒褐色できれいな土層から、コンクリートがらが出ることもあり判然としない。土を置く場所がなく別の所へ持って行っているため、表土剥ぎが終了していない。

7月16日 表土剥ぎとともに、土のうを使って東側に土を上げるためのスロープを作った。ほぼ半日で完成し、鋤簾を使って残っている3層土(黒褐色)を掘削していく。出土遺物は土師器の欠片が主である。浄化槽が遺構を壊していると思われる。北側で1m程、浄化槽と調査区の隙間があるが、その中の鉄管が外せないため隙間の調査は不可能である。

7月17日 中央部分の3層土(黒褐色)を鋤簾で削り、平らにしながら土のうを作っていく調査区外周を囲っていく。色の抜けたような褐色土が下から出土するが、すぐに酸化して黒褐色土に変化するため、まだまだ削らなければならない。実際どれだけ下げればいいのかわからないため、トレンチを壁際に掘りたいが、浄化槽周りのカクランを抜き、そこから土層の確認する方法を取った方が効率的と思われる。しかし、そのカクラン壁は削っていくと残らない。4層土(色の抜けた褐色)の当たりをつけるため、カクランを抜いて壁を見ていく方針で進めることとする。

7月18日 研修のため作業休止。

7月22日 これからの掘削深度を確認するため、浄化槽の埋設の際に掘られた周囲のカクランを抜いて、遺構検出層の上面にラインを入れる。約15~20cm程下のようであるが、東側では少し掘削すると遺構検出層である4層上面が出土する。東側の方が17cm程4層上面が高い。また、南側は20cm程4層上面が高い。北側は3層黒褐色土が残るため低いと思われる。

7月23日 調査区北側に土層確認用のトレンチ1を入れる。3層が東側に向かうにつれて厚くなっている。掘削中に、土師器片を5点ほど確認。調査区南側のスロープ付近を中心として、オレンジ色(錆びた感じ)のある層を除去。東側はオレンジ色の土はさほど見られなかった。

7月24日 トレンチ1から中央に向かい3層土の掘削とともに清掃を行う。北東側には、人の往来があったことで硬化し凸凹になり、それを補修するために土を入れていると思われる箇所がある。南東側に40~50cm程のハニカム状の掘り込みの他に、北壁部分には道か溝のような遺構を確認する。3層を掘り下げ

ると、土師器片が数点出土した。4層では土師器片の出土が少なくなる。トレンチ1付近より黒曜石欠片2点、調査区南側スロープ付近より黒曜石欠片が3点、2cm程の大きさの石鏝1点が確認できた。

7月28日 東側より清掃を行い遺構検出を試みる。中央部に入る溝が検出できたものの北側は判断としなかったので3～5cm掘り下げを行う。南東側のハニカム状の掘り込み土の堆積については、半載して黒褐色土の入り方について調べる。3層土のようで、断面に入っている箇所を指で押すと、柔らかくしまりのない土であった。来跡された岡本主幹の見解としては、クラック（ひび割れ）に3層土が入り込んだものではないかとの事であった。また、浄化槽東側トレンチ2の横側の四角いカクランは、表面に出ている陶磁器片から江戸期の芋穴ではないかと言われ、掘ってみて遺物から判断することとした。

7月29日 浄化槽南側の掘り下げを行い、カクランを抜くようにした。西端にサブトレンチを掘ると、2層下に3層が見られるが、東側断面と比べると薄く、黒褐色土も入っていない箇所も多い。中央部に向かって従って、3層が残っていないようである。浄化槽南側のトレンチ3では、溝の掘り込みが断面から確認できた。

7月30日 浄化槽南側の平面で2層土（暗褐色）を掘削し、4層土直上（3層土黒褐色）まで下げ、溝の上端を確認する。溝埋土上にSK1、SK2を検出。SK1はトレンチ3の断面から、掘方側面に、焼土もしくは鉄錆(?)が入り、底部には、焼土もしくは鉄錆のような色の土が厚く入る。これは、トレンチ3の内容はガラが多く、錆びたような色であり、トレンチ3のガラからの色の浸透も考えられる。しかし、壁面を削ってもオレンジ色の埋土はなくならないため、底部に焼土らしきものが厚く詰まっていると考えるのが妥当だと思われる。SK2は、十分には断面を見ることができていないが、埋土には、黒褐色土に大きめの黄褐色土粒が入る。SD1は南から北へ走る溝のようである。南側壁にトレンチを入れ深さを確認すると、60～80cm程で硬い土になる。埋土は暗褐色土に黄褐色土粒が混じった感じである。トレンチ3側から見ると、底部に近い方に固くしまった箇所（ねずみ色に近い）があり、ブロック状になっているため、底部の方は一括で埋めてある可能性がある。

7月31日 SD1、SK1、SK2の検出状況の写真撮影を行う。西側清掃時に陶器片が数点、北側清掃時に黒曜石剥片1点、土師器片1点確認できた。

8月1日、4日～6日 雨天のため作業休止。

8月7日 西側・北側の清掃、SD1、SK1、SK2の土層断面の写真撮影。SK1底部付近の焼土(?)層の周りの埋土が基本土層の4層土と似ているため、SK1は黒褐色土までではないかと考えるが、黒褐色埋土中の焼土と底部付近の焼土が別であるならば、同一箇所に年代差を持って焼土があるとは考えにくい。しかし、SK1上の黒褐色埋土中に焼土、炭などが見られない場合には、SK1の下に別遺構のSKがあると思われる。芋穴1～4はSK3～6とし、半載する。

8月8日 台風11号接近のため台風養生を行う。SK3～6（江戸期芋穴）の完掘後、土層断面、完掘状況撮影。SK1、SK2、SD1の土層断面を途中まで実測。その後、SD2を掘削するが、落としすぎのためか黒褐色土が残っておらず、地山の隙間に入り込んだ黒褐色土が残っており、幅5～10cm程の黒褐色土が地山中に入っている状況であった。壁やトレンチ1の土層からも、地山に入っている3層黒褐色土が見られることから、地山（4層）のひび割れの間に入り込んだ3層土が遺構のように見えるが、実は遺構ではないという感じを受ける。このため、地山の隙間の黒褐色土を削っていくと、4層土が硬化面のように見えるのではと考える。

8月11日 SK1を完掘させると、下には、焼土か鉄分が不明だが赤褐色～黄褐色の層が一面に残存していた。SK1埋土中には赤褐色～黄褐色の土は入っていなかったため、この土は下の土坑のものと考えられる。そうなると、下の土坑とSK1は別物となり、下の土坑SK7は、SD1、SK2を切っているもの

と思われる。東側の清掃では、4層土がひび割れ、その間に3層土が入り込んでいるようで遺構は検出できなかった。ピットのように見えるものもあるが掘るとすぐなくなってしまう。4層土がやや暗い箇所にサブトレンチを入れてみるが、やはりひび割れの間に3層土が入り込んでいる状況が見られた。北側から南側にかけて清掃を数回かけたところ、剥片、石鏝が各1点出土。

8月12日 浄化槽東側を5cm程掘削すると、所どころに点々と石器（安山岩または黒曜石）の破片や土器が出土する。もしかすると、薄いしみのように縄文の遺構があったのかもかもしれない。もう一度高さを揃えたところで検出を行うようにする。SK1は、先日の完掘で土層断面の埋土①のところまで掘削していた。まだ黒い土が残っているため、焼土または鉄錆面が出土するところまで掘削すると、ほぼ埋土②（SK7埋土と思っていたところ）がなくなってしまった。埋土②は硬くしまりもあるが、やはり焼土、炭化物などは見当たらなかった。

8月13日 作業員は17日まで盆休み。平面割り付け図、遺構実測図作成。遺物取り上げ。

8月14日 平面割り付け図作成、遺物の取り上げ。SK1底部の掘削を行う。側面のように赤い焼土または錆のようなものは、底部全面に出ることはなく、暗褐色の硬い層に赤い土が混じるような感じである。

8月15日 現場作業休止。

8月18日 4層上面の掘り下げを行い、その後清掃し、古代、中世遺構出土状況の撮影を行う。SK3～6（江戸期芋穴と想定）が切っている土坑を完掘させる。併行して、SK1を赤い焼土が出るところまで掘り撮影する。トレンチ1の深掘りに入る。4層上面から30cm程下でやや暗い黒褐色土層、60cm下で明るい暗褐色土層（上面より硬い）である。やや暗い黒褐色はブラックバンド（B・B）ではないかと考える。

8月19日 トレンチ1の深掘りを引き続き行い下部の層位を確認する。4層上面より約30cm下から黒褐色土層（4層土が暗くなったような土）が出土する（5層）。厚さは約30cmである。4層上面から約60cmの深さに暗褐色土が出土する（6層）。ブロック状でしまりは強い。4層上面から約120cmの深さにロームが出土する（7層）。

8月20日 浄化槽東側の4層土掘り下げに入る。遺構は見当たらないが、土器が数点とC2グリッドから石鏝（安山岩と思われる）が出土した。また、台石かもしれない50cm程の平たい石も出土している。午後から調査区に仮置きしていた排土の土捨て場への移動を開始。

8月21日 浄化槽東側の掘り下げを行う。かなり土が硬く掘り下げに時間を要する。C2・D2・E2グリッドから出土した石は、集中して出土することもないため集石ではないと判断した。SK7は、焼土が暗褐色土中にブロック状に入り層状ではないことから、燃やした場所ではなく捨てた場所という可能性もある。

8月25日 浄化槽南側、SK1の西隣にあるSK2の再検出を行い、範囲を確定させて掘り下げていった。黒褐色の中に黄褐色土の混じりのある埋土から、黒褐色中に赤褐色または黄褐色の繊維質の混じりが多くみられる埋土に変わったところで掘削を止めた。境から滑らかに落ちているはずだが、写真では段差がついているように見て取れる。下端はひょうたん型ともう一つ落ち込みがあるような形となっている。東側が一部掘り下がっていなかったためスロープを中心に掘り下げを行った。遺物は4、5点程、土器片と黒曜石（2cm大）が確認できた。特に掘り下げる予定はなかった調査区北東の端が数cm掘り下がった所から石鏝1点と黒曜石が出土した。

8月26日 SD1を再検出後南北方向に半載。SD1の掘り込みは、最初はそこまで深くなく徐々に下がっている。土器片数点出土。東側壁面の土層断面の実測。東側掘り下げの結果、土器片、2cm程の黒曜石、石器片1点確認。

8月27日 SD1の半載。中央辺りから急な深い落ち込みを確認。遺物は、土師器片、縄文土器片、陶

磁器片が混在している。

8月28日 東側の掘り下げを行ったが、25日に出土した場所から10cm程南側より小さい石礫が出土。トレンチ1の土層線引きと写真撮影を行う。トレンチ1から分かる4層以下層の層序は、4層→⑤薄黒い層→⑥4層の土色と似ている硬い層→⑦赤褐色土層で構成されている。SD1の西側半分の半載が終了していたので、残りの残存埋土を分層し層位ごとに掘削していく。層位ごとの遺物の採集と硬化面等の検出を期待していたが、遺物はほとんど出土しなかった。SD1は5層で構成されているように思う。上層に向かうほど、オレンジ色の焼土のようなブロックが混じっている特徴がある。硬化面はSD1埋3層上面でやや硬い感じの土は見られたが、範囲をとるほどはつきりとはしなかった。SD1埋4層上面では、ややしまりのある部分が見られるが、硬化面と判断するのは難しい。SD1の東側が落ちる辺りで土坑と思われるSK12を検出。溝の側溝でほと期待したがSD1に沿って続かない。

8月29日 北壁土層断面実測。遺物の点上げ。

9月1日 東側の掘り下げとSD1の掘り下げを層位ごとに進めていく。明瞭な硬化面は出土しない。SK1、SK2の周りの土が硬化している。SK1、SK2の崩れを防ぐためのものかもしれない。硬さは、移植ゴテで崩そうとすると、他の箇所のように崩しにくく、移植ゴテで削ると「シャキシャキ」と削れる感じがする。

9月2日 調査区内清掃、調査区全景の写真撮影、SD1掘り下げ。SK2の直下の埋土は赤褐色または黄褐色の細かい粒子が入り、やや赤みがかっていて硬く締まるため、SD1の埋土とは異なるようである。かなり掘削しているので、残存部だけでも図面に入れていきたい。ただ、硬く締まった土はどのように形成されるのかを考えると、その部分だけ点圧をかけ硬くしていく、または点圧がかかって硬くなったと思われるが、SK2のように楕円状に点圧をかける、または点圧がかかるということがあり得るのか考える必要がある。元々、SK2は鏝のような線がうっすらと入っているところで範囲を取っているため疑問が残る。また、トレンチ3からの断面で見ると、SK2の底部の落ち方はSD1と同じである。一応SK2が残存するという考えで記録する。焼土か鉄分が検出中だったSK1の土を土壌分析用のサンプルとして採取する。

9月3日 調査終了に向け、スロープの撤去、土のうの片付け。SD1の土でSK2として検出した範囲の埋土の硬い部分をSK2としている。手ごたえ、色などSD1埋土とは異なるが、ここで見た範囲で深さまでSK2にしていのか疑問が残る。

9月4日 現場撤去準備。SD1清掃、実測。浄化槽から出ている管から雨水が出ているのを見て、水がちょうどSD1底部でSK2の範囲で広がっている様であった。このことから、SK2は浄化槽からの水漏れが広がっている範囲であり、その水の影響で蒸発の際に硬化したり、土中の鉄分が赤または黄褐色となり、SD1埋土中に細かな赤褐色が確認されたものということもあるのではと考える。SK2の検出で、黄褐色の染みで線を引きついでいたことから、SD1埋土中で浄化槽の水漏れの影響を受けた箇所をSK2としていただけであり、SK2はSD1埋土中には存在しないのではないかと考えられる。

9月5日 道具、機材撤出。調査終了。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

健軍神社周辺遺跡群の所在する託麻原台地は、広大な洪積台地であり、阿蘇外輪山の一つである依山から南西に緩やかに伸びている。この台地は、北は白川、南は加勢川の支流・秋津川によって分断されており、白川沿岸においては河岸段丘が発達している。台地の西～南西部は小嵐上をなしており、崖線に沿って水前寺公園や江津湖などの豊かな湧水点が並んでいる。

健軍神社周辺遺跡群は、この託麻原台地の南西部に位置する。この付近は、江津湖に注ぐ庄口川などの小河川によって浸食され、南西方向に張り出した台地面を形成する。健軍神社周辺遺跡群は、庄口川の浸食谷を囲むように展開している。

今回調査区は遺跡の北東端に位置する。周辺の地形を見ると、陸上自衛隊健軍駐屯地内であるため、敷地内はほぼ平坦であるが、東側には山ノ神地区、山ノ内地区の微高地、西側には健軍川、南西側には庄口川の浸食谷があり、南西側に緩やかに傾斜している地形である。調査区の標高は27m台である。

第2節 歴史的環境

健軍神社周辺遺跡群は、名称の異なる複数の遺跡を包括している。庄口川東側には健軍上ノ原遺跡、西側には健軍神社遺跡・鳥居原遺跡、庄口川谷部の西斜面にはミョウゲンジ屋敷下遺跡が存在する。これらを包括した健軍神社周辺遺跡群という扱いで、これまでに21回の本調査が熊本市文化財課（現文化振興課）により行われている。

旧石器時代の資料は、第7次調査区から出土した黒曜石製の細石刃1点があるのみである。この他、周辺遺跡資料に健軍藤原遺跡（陸上自衛隊健軍駐屯地内）から出土した緑泥片岩製剥器1点、水源地遺跡第3次調査区（江津湖遺跡群内）から出土したチャート製の三稜尖頭器1点、江津湖採集とされる安山岩製の三稜尖頭器1点（飯田良彦氏採集資料）が挙げられる。いずれも明確な文化層に伴うものではなく、また、散発的な存在状況である。

縄文時代早期の資料は、遺跡範囲北東側に偏在する傾向を認める。遺構としては、第2・6・9・11次調査区検出の集石遺構が挙げられる。第9次調査区においては集石遺構8基が検出され、押型土器・塞ノ神式土器がまとめて出土している。前期～後期中葉の資料は希薄である。このなかでは、鳥居原遺跡1976年調査区から出土した北久根山式土器、健軍神社遺跡から出土した鐘崎式土器が形状を復元し得る資料として特筆できる。縄文時代後期後半～晩期前半の資料は充実している。鳥居原遺跡、健軍神社遺跡、健軍上ノ原遺跡は当該期を主体とした遺跡であり、これらは、立地や調査事例からみて、それぞれ別個の集落と考えられる。

健軍上ノ原遺跡（御領式～古閑式期主体）は最も規模が大きく、周辺域における拠点集落であったとみられる。1970年調査区（健軍上ノ原遺跡A・B地点）においては、多量の遺物と竪穴住居が検出され、竪穴住居の埋土下位から炭化したイネ・オオムギ・ヤブツルアズキが出土した。この発見は、縄文農耕の証拠かとの論議をよんだ事例である。その後、周辺において同遺跡内の調査が行われている。A・B地点に近接する第7次調査区は、共同祭祀遺構を行ったエリアと目される。墓塚と見られる土坑や埋設土器8基が検出され、加えて、石冠様、石刀様の石製品、多数の土偶、含クロム白雲母岩（所謂長崎産ヒスイ）製の玉類などが出土するなど、多くの祭祀関連資料が出土した点が注目される。また、大形の板状礫（砂岩）が土器・玉類とともに出土しており、これは立石の可能性を指摘し得るものである。以上の他、該記の遺構としては

遺跡推定範囲南側の第10・11次調査区から検出された埋設土器、第12次調査区から検出された土坑群などが挙げられるが、北側の調査区(第2・3・6次調査区など)においては明確な遺構は検出されず、遺物のみの出土である。このことから、後期後半～晩期前半における遺跡の主体は、推定範囲南側の直径200～300m程度であったと考えられている(網田2004)。

健軍神社遺跡は、1972年、健軍神社境内における忠魂碑建設の際に遺物が採集されたことから発見された遺跡で、その後神社北側一帯の区画整理事業に伴うトレンチ調査(1974年調査)や周辺地における数次の本調査が行われている。健軍上ノ原遺跡と同じく、御領式～古閑式期を主体としており、健軍神社境内からその北側70～80mの一帯にかけて濃密な存在状況を示す。第14次調査区においては該期の竪穴住居跡2軒・埋設土器1基を検出している。

鳥井原遺跡は鳥井原式土器の標識遺跡である。1976年調査区においては出土量が多く、鳥井原式土器を主体に、三万田式・御領式・古閑式土器が見られるが、近隣の調査区においては希薄なあり方である。また、いずれの調査区からも遺構は検出されていない。このことから、本遺跡の範囲は小規模であり、「季節的な作業の場または祭祀などの特殊な場所」(富田1977)と位置付けられる。

弥生時代～古墳時代の資料は極希薄である。

古代の資料は遺物・遺構ともに散在的である。第4次調査区において検出された墓壇においては、骨蔵器(須恵器台付壺)を埋設しており、骨蔵器の中からは火葬骨とともに墓誌とみられる鉄板片が出土している。同調査区からは鉄製人形も出土している。該記の生活域は不明瞭である。第10次調査区における小型の竪穴建物も挙げられるが、1軒単独の検出である。

中世の資料は、遺跡推定範囲全域に認められる。遺構のうち最も多いのは道路で、第2・4・7・8・9・10・12・13・15・16・17・18・20次調査区において検出されている。多くは幅が狭い、おそらくは自然硬化による道路であるが、側溝や波板状の掘り込みを伴うものもみられる(第4・12・15次調査区)。注目される遺構として、近接する第10・11次調査区において検出した土坑墓群を挙げる。供献土器から10世紀後半～11世紀初頭から13世紀代に営まれたもので、第10次調査区においては、5基が墓道に沿うように並んでいる。輸入陶磁器を伴うものは未検出であるが、墓群開始期(10世紀後半～11世紀初頭)のものについては黒色土器碗を伴っている。これらは存在状況からみて屋敷墓でなく、共同体内の有力者の類代墓と考えられる。造墓の要因としては、庄口川谷部を挟んで存在する健軍神社との関連が想定される。本社の創建は、11世紀初頭頃に阿蘇社を分祀したことによると考えられ、阿蘇大宮司家の熊本平野部における拠点であったと考えられている(阿蘇品1998)。土坑墓群の存在は、このことを反映した可能性が考慮される。遺物出土状況において注目されるのはミョウゲンジ屋敷下遺跡である。約1坪の狭い範囲から12世紀後半～14世紀前半頃の遺物が大量に出土したもので、在地製品の他、輸入陶磁器・畿内系(楠葉型)瓦器碗などが認められる。「ミョウゲンジ」の地名は健軍神社の神宮寺に由来するとみられ、神宮寺は少なくとも12世紀初頭には存在が確実であり、50町を所領する有力寺院であったという(森下1973・工藤1998)。なお、付近には「坂東」という名字が残っており、これは鎌倉時代、北条氏が健軍社領の所領職・地頭職にあったことによるものと考えられる。

美濃口正朗 2012「健軍神社周辺遺跡群第20次調査区 第1章序説3位置と環境 p.19.20.22～26」

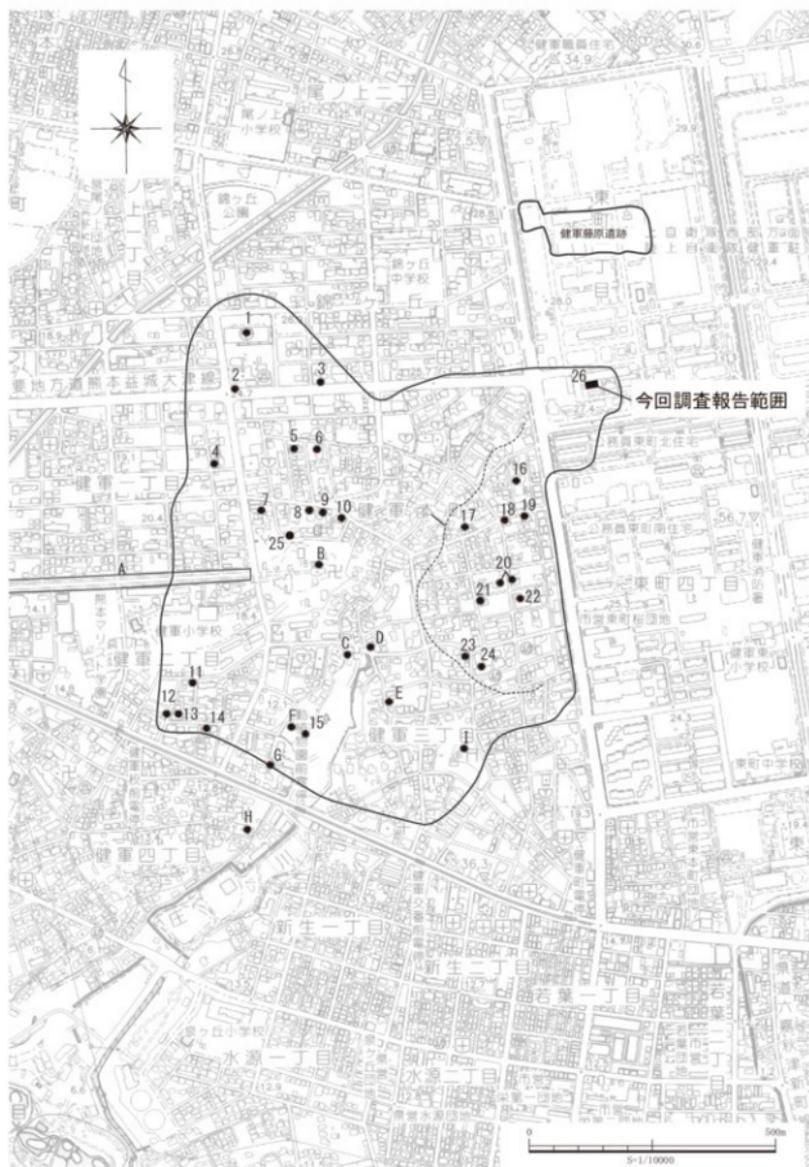
『熊本市の文化財第12集 熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集一平成23年度』より引用



第 1 1 圖 健軍神社周辺遺跡群周辺遺跡地図

第2表 健軍神社周辺遺跡群一覧

熊本県(43)							
熊本市(201)							
県地区 遺跡番号	熊本市地区 遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
201-293	8-103. 9-75.13-1	江津湖遺跡群	神水町、函岡町 ほか	縄文～中 世	包蔵地		上江津遺跡、下江津遺跡、江津中ノ島遺 跡、上ノ門遺跡、 広木遺跡、泉ヶ丘遺跡、古原教遺跡 H16.2.24 範囲修正
201-332	9-48	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～ 平安	包蔵地		県北バイパス調査、市マシオン調査、 田辺附三調査など H16.2.24 範囲修正
201-334	9-50	乾原・迎八反田	長瀬町乾原・迎 八反田	縄文～平 安	包蔵地		乾原縄文後晩期中心、迎八反田縄文早期 中心
201-337	9-53	辻	渡鹿7丁目	縄文～平 安	包蔵地		縄文後晩期、へら掘き土器・墨書土器
201-338	9-54	新南部西原	新南部町	縄文～平 安	集落		
201-339	9-56	南平上	新大江3丁目南 平上	奈良～平 安	包蔵地		
201-340	9-57	帯山遺跡群	帯山1丁目	縄文～平 安	包蔵地		布目瓦、曾畑、阿高、竹崎 H21.7.22 範囲縮小
201-341	9-58	保田窪東一本松	帯山7丁目	縄文～平 安	包蔵地		
201-342	9-59	三郎塚	東区三郎	縄文～平 安	包蔵地		
201-343		臺灣宝篋印塔	東区三郎	中世	石造物	市	元は天福寺境内にあった
201-344	9-61	新外 A	東区新外	縄文	包蔵地		
201-345	9-62	新外 B	東区月出	縄文～平 安	包蔵地		
201-346	9-63	小嶺	東区小峯	縄文～平 安	包蔵地		
201-355	9-74	神水	神水本町・出水 2丁目	縄文～平 安	包蔵地		県・市調査、報告書あり
201-356	9-77	健軍神社杉馬場	健軍2丁目ほか	江戸	参道	市	市指定史跡(健軍神社杉並木)
201-357	9-78	健軍神社周辺遺跡 群	健軍2丁目	旧石器～ 中世	包蔵地		上ノ原縄文後期灰化米出土、市報告書あ り
201-358	9-79	健軍神社境内	健軍本町	中世	寺社	市	市指定史跡
201-359	9-80	佐土原	健軍町佐土原	縄文～平 安	包蔵地		
201-361	9-82	下津代里	東区沼山津	縄文～平 安	包蔵地		
201-362	9-83.13-5	沼山津貝塚	東区沼山津	縄文	貝塚		縄文中期・後期
201-363		四時軒及び四時軒 跡	秋津町沼山津	江戸	建造物	市	市指定建造物及び史跡
201-491		八丁馬場板群碑	神水本町	中世	石造物		3基
201-512	9-49	西原	新南部	縄文	包蔵地		押型文
201-513		三郎塚古墳	東区三郎	古墳	古墳		
201-514		佐土原芥川板碑	東区佐土原	中世	石造物		線刻観音板碑
201-518	9-86	健軍遺跡群	新生1丁目、健 軍4丁目	縄文～平 安	包蔵地		
201-519		ミウゲンジ屋敷 板碑	健軍4丁目	中世	石造物		阿弥陀、天正14年
201-520		真宗寺板碑	健軍町4丁目	中世	石造物		天文14年
201-521		真宗寺入口地蔵	健軍4丁目	江戸	石造物		寛永4年
201-522		妙見の芥川板碑	健軍4丁目	中世	石造物		
201-523		健軍の一字一石塔	健軍4丁目	中世	石造物		安永9年
201-551	9-90	健軍藤原遺跡	東町1ー1	旧石器～ 中世	包蔵地		溝(古代・中世)、不明遺構(縄文晩期)、 旧石器 掘立柱建物(不明・中世)、円形周溝遺 構(縄文晩期)
201-552	9-89	健軍京塚下遺跡	神水	古代	集落		



第12図 遺跡内調査地点図

第3表 健軍神社周辺遺跡群内調査地一覧

※ Noは第12図に対応する

No	遺跡・調査区	主な遺構	主な出土遺物
1	高井原遺跡(1977年調査)	無し	不明(希薄)
2	高井原遺跡(1976年調査)	無し	縄文時代:土器(後期～晩期前半土器主体)、石器、石製垂飾(環状)/中世:土器、陶磁器、土鍔、石鏝、瓦
3	市17次調査区	中世:細い道路	縄文時代:後期後半～晩期前半土器/古代・中世:土器、陶磁器
4	市16次調査区	中世:道路	縄文時代:石鏝など/中世:土器
5	市8次調査区	中世:細い道路、土坑	縄文時代:後期・晩期前半土器、石斧、石鏝、石匙/中世:土師器、陶磁器、陶製紡錘車、滑石製品、無文銭
6	市9次調査区	縄文時代:集石/中世:溝、道路	縄文時代:早期・晩期土器(竪ノ神式主体)、石器/中世:土器、陶磁器、瓦
7	市18次調査区	古代・中世:溝、細い道路、土坑	古代・中世:土器、陶磁器
8	市1次調査区	細い道路	縄文時代:晩期土器、石器
9	市14次調査区	縄文時代:竪穴住居、埋設土器、小穴/古代・中世:細い道路、土坑	縄文時代:後期後半～晩期前半土器、石器(石斧多)/古代・中世:土器、陶磁器、瓦
10	市20次調査区	縄文時代:小穴/中世:溝、細い道路、土坑、不明遺構	縄文時代:晩期前半土器、石器、含クロム白雲母製玉類/古代・中世:土器、陶磁器
11	市13次調査区	古代・中世:道路、土坑	縄文時代:後期後半～晩期前半土器/古代・中世:土器、陶磁器
12	市15次調査区	中世:溝、道路、土坑、不明遺構、竈	縄文時代:晩期前半土器、石器/中世:土器、陶磁器、瓦、石鏝、土鍔
13	市4次調査区	古代・中世:溝、道路、土坑、火葬墓	古代:骨蔵器、鉄製人形/中世:土器、陶磁器、石製品
14	市5次調査区	中世:溝、土坑/近代:西南戦争塹壕	中世:土器、陶磁器、瓦
15	ミョウゲンジ屋敷下遺跡	未確認(採集)	中世:土器、陶磁器、滑石製品、瓦
16	市6次調査区	縄文時代:集石	縄文時代:晩期土器、石器
17	市19次調査区	縄文時代:土坑	縄文時代:後期後半～晩期前半土器、石器/古代・中世:瓦
18	市3次調査区	無し	古代:土器/縄文時代:晩期前半土器
19	市2次調査区	古代・中世:細い道路/縄文時代:集石	縄文時代:土器(黒川式主体)、石器
20	健軍上ノ原遺跡 A・B地点	縄文時代:竪穴住居、埋設土器/中世:溝、細い道路、土坑、不明遺構	縄文時代:土器(後期後半～晩期前半土器主体)、石器、含クロム白雲母製玉類、土製勾玉、土偶/古代・中世:土器、陶磁器、石鏝、瓦、土馬
21	市12次調査区	縄文時代:土坑、小穴/古代・中世:溝、道路	縄文時代:後期後半～晩期前半土器、石器
22	市7次調査区	古代・中世:溝、細い道路 縄文時代:埋設土器、土坑・小穴多数	旧石器時代:細石刃/縄文時代:後期後半～晩期前半土器、石器(立石状の板石、石冠状石器、石刀状石器など)、含クロム白雲母製玉類、土偶
23	市11次調査区	縄文時代:埋設土器、集石、小穴/古代・中世:土坑墓、土坑	縄文時代:土器(後期後半～晩期前半主体)、石器(石斧、磨石類、台石、石鏝)、土偶/古代・中世:土器
24	市10次調査区	縄文時代:埋設土器/古代・中世:竪穴住居、道路、土坑墓	縄文時代:後期後半～晩期前半土器、石器、含クロム白雲母製玉類(未成品多)、土偶/古代・中世:土器、陶磁器、瓦
25	市21次調査区	縄文時代:埋設土器、小穴/古代・中世:小穴/近世:溝	縄文時代:晩期前半土器、石器/古代・中世:土器/近世:陶磁器
26	本調査区	中世:溝	縄文時代:晩期土器、石器/中世:土器/近世:陶磁器
ア	健軍神社遺跡 (1972・74年調査)	縄文時代:埋設土器	縄文時代:土器(後期～晩期前半土器主体)、土偶/古代・中世:土器、陶磁器
イ	健軍上ノ原遺跡(破線内)	遺跡推定範囲より東側は削平により消失している。	
No	名称	内容	
A	健軍神社杉馬場 (八丁馬場)	慶長年間(清正)により整備、細川期に長さを倍に延長(約1200m)	
B	健軍神社	長和2年(1013)に阿蘇社から勧請、永承元年(1133)に神宮寺消失、治承4年(1180)に阿蘇惟泰が大宮司に補任(阿蘇社大宮司と兼務)、嘉禄2年(1226)以降は阿蘇家支流が大宮司となる。	
C	真光寺の五輪塔片・板碑	五輪塔片:室町期、火輪・空風輪/板碑:室町後期、上にキリーク・サ・サク、下に「上……結諸業八万四千部奉造立…罪…七分全得…」	
D	堂坂一石五輪塔	室町期、カン・ラン・バン・アンを刻む	
E	上ノ原不動堂の五輪塔片	室町期、空風輪が一石五輪塔の破片	
F	伝ミョウゲンジ屋敷と板碑	ミョウゲンジは神宮寺か/板碑:天正14年(1586)銘、上にキリーク・下に「昌聚妙火神定尼靈位」を刻む	
G	庄口天満宮内の五輪塔片	室町期、火輪・空風輪・一石五輪塔片	
H	真宗寺の板碑	天正14年(1545)、上にバク、右下に「興奉修釈蓮種子尊形」、左下に「天文十四年…」	
I	松尾神社	創建年代不明、国府官人との関連が想定される。	

【主要参考文献】

〔健軍神社周辺遺跡群〕

- 大城康雄 1995「健軍神社周辺遺跡群第1次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報 第1号—昭和63年度～平成3年度—』（以下「年報」）熊本市教育委員会（以下「熊本市教委」）
- 網田龍生 2004「健軍神社周辺遺跡群第2次調査区」・「健軍神社周辺遺跡第3次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成15年度—』（以下「報告集」）熊本市教委
- 美濃口正朗 1997「健軍神社周辺遺跡群第4次調査区」・「健軍神社周辺遺跡群第5次調査区」『報告集—平成9年度—』熊本市教委
- 大城康雄 1999「健軍神社周辺遺跡群第6次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教委
- 金田一精 1999「健軍神社周辺遺跡群第7次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教委
- 美濃口正朗 1999「健軍神社周辺遺跡群第8次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教委
- 赤星雄一 1999「健軍神社周辺遺跡群第9次調査区」・「健軍神社周辺遺跡群第10次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教委
- 山下宗親 1999「健軍神社周辺遺跡群第11次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教委
- 原田颯昭 2000「健軍神社周辺遺跡群第12次調査区」『年報 第3号—平成9年度～平成10年度—』熊本市教委
- 原田颯昭 2003「健軍神社周辺遺跡群第13次調査区」『報告集—平成13・14年度—』熊本市教委
- 山下宗親 2001「健軍神社周辺遺跡群第14次調査区」『年報 第4号—平成11年度—』熊本市教委
- 美濃口正朗 2003「健軍神社周辺遺跡群第15次調査区」『年報 第5号—平成12年度～平成13年度—』熊本市教委
- 稲津幅洋 2004「健軍神社周辺遺跡群第16次調査区」『年報 第6号—平成14年度—』熊本市教委
- 美濃口正朗 2005「健軍神社周辺遺跡群第17次調査区」『年報 第7号—平成15年度—』熊本市教委
- 山下宗親 2010「健軍神社周辺遺跡群第18次調査区」『報告集—平成21年度—』熊本市教委
- 美濃口正朗 2008「健軍神社周辺遺跡群第19次調査区」『報告集—平成19年度—』熊本市教委
- 美濃口正朗 2009「健軍神社周辺遺跡群第20次調査区」『年報 第11号—平成19年度—』熊本市教委

〔健軍上ノ原遺跡〕

- 小谷眞宣他 1971『熊本市健軍町上ノ原遺跡調査報告書』熊本市教委
- 富田統一 1973「上ノ原遺跡」『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教委
- 富田統一 1996「健軍上ノ原遺跡」『新熊本市史 史料編 第1巻 考古資料』熊本市

〔健軍神社遺跡〕

- 富田統一 1996「健軍神社遺跡」『新熊本市史 史料編 第1巻 考古資料』熊本市

〔烏井原遺跡〕

- 富田統一 1977「烏井原遺跡発掘調査報告書—熊本市健軍町—」熊本市教委

〔ミョウゲンジ屋敷下遺跡〕

- 富田統一 1979「健軍・ミョウゲンジ屋敷下の出土遺物」『昭和53年度 熊本市埋蔵文化財発掘調査報告書』熊本市教委

〔健軍神社〕

- 森下功 1973「健軍神社」『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教委
- 阿蘇品保夫 1998「第三編第一章第二節 武士と神社」『新熊本市史 通史編 第二巻 中世』熊本市
- 工藤敬一 1998「第一編第三章第一節 建久園田帳と鹿詫二群の荘園公領」『新熊本市史 通史編 第二巻 中世』熊本市

〔その他〕

岡村伴輝 1973「健軍堂坂地藏堂・観音堂」・「庄口天満宮と五輪塔残欠」・「庄口のミョウゲンジ屋敷」『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教委

北川賢次郎 1996「堂坂一石五輪塔」『新熊本市史 史料編 第一巻 考古資料』熊本市

鈴木喬 1973「上ノ原不動堂」・「松尾神社」『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教委

森下功 1973「真光寺」・「真宗寺」・「八丁馬場」『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教委

第3章 調査の方法

第1節 調査区・グリッド設定

重機による表土除去を行い、その清掃後、引き続き記録保存のための実測図作成に必要な基準作りとして、光波測距機を使用してメッシュ杭設置及び4級基準点測量を行った。平面直角座標Ⅱ系における座標地を用い一辺5mの区画を設定し、西→東へA～E、北→南へ1～4とした。

第2節 調査方法

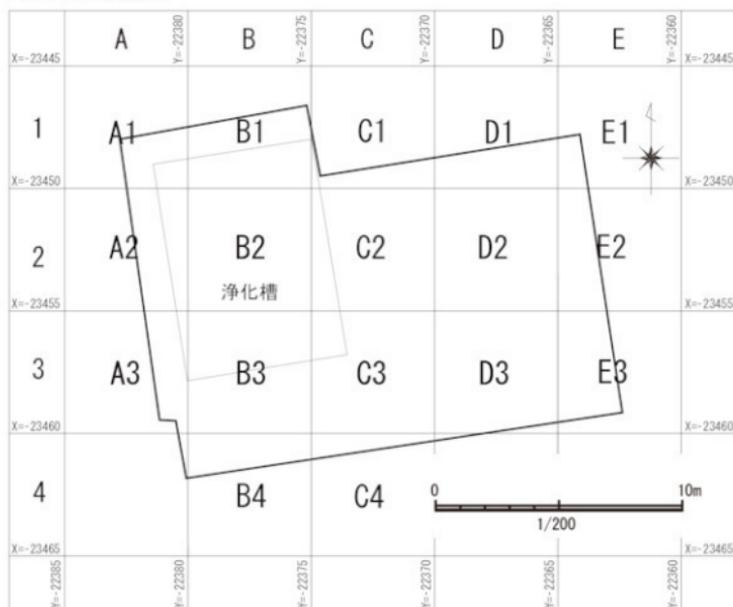
1～2層は重機により掘削し、3～4層、遺構は手掘りしている。5層以下は部分的にトレンチを掘り、遺構、遺物検出を行った。

調査は、遺構の検出と遺物の検出を中心に実施した。遺構は、平面形の確認を行った後に、土層観察のためベルトを残し掘り下げた。その観察後、ベルトを取り除いて全体像を確認する。その間に作成される資料には1/10もしくは1/20に縮尺して作る平面図、土層断面図等がある。遺物の検出は遺構調査の完了後に実施した。検出した遺物の取り上げは光波測距機によりx・y・zの座標を測定、記録を行った。

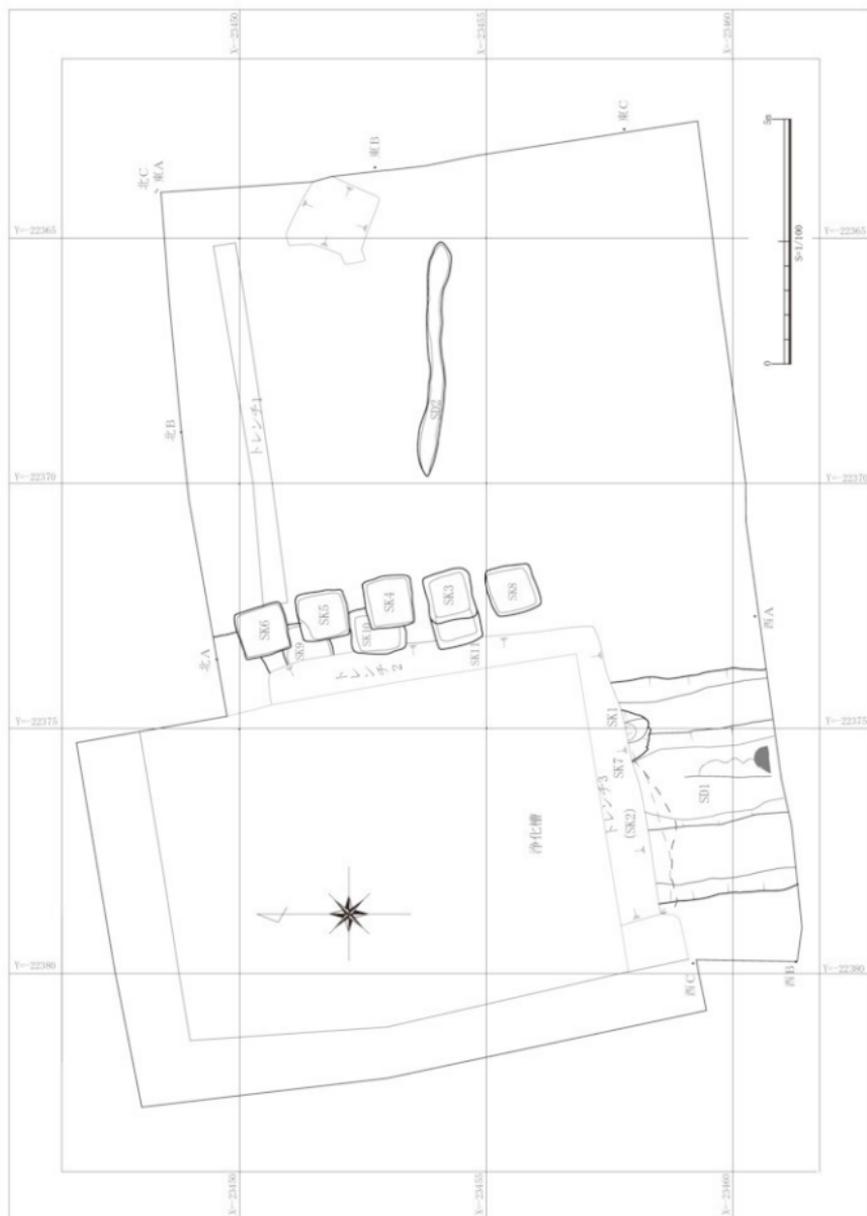
なお、検出された遺構については、以下のとおり略号を用いて調査を行った。

土坑：SK 溝：SD

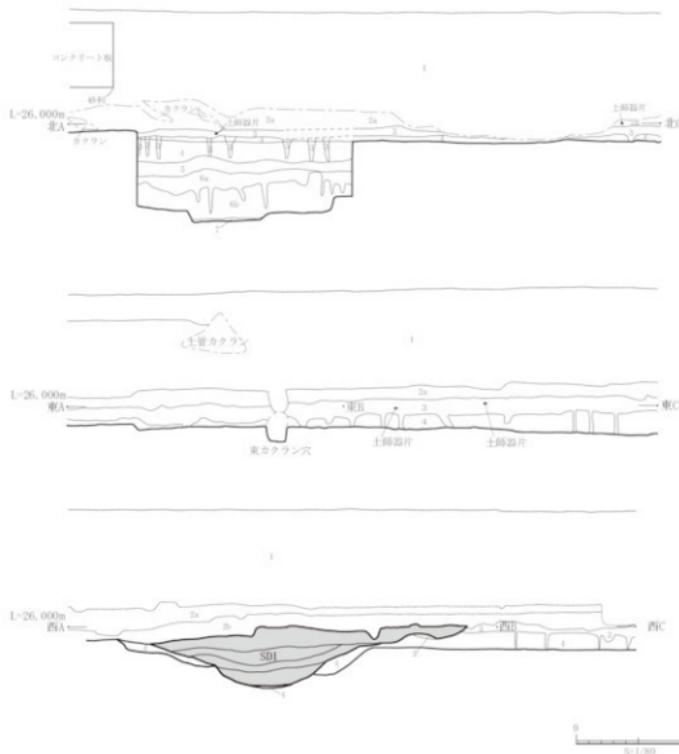
写真は検出時、遺物出土時、使用時、掘方等の各段階において、適時モノクロフィルムとリバーサルフィルム、小型カメラ(35mm)と中型カメラ(6cm×7cm)を使用し撮影した。メモ用にコンパクトデジタルカメラを使用し撮影した。



第1-3図 陸上自衛隊健軍駐屯地内調査区グリッド設定図



第14図 陸上自衛隊健康駐屯地内 主要遺構配置図 (1/100)



1. 現代整地層 覆乱など

- 2a. 10YR3/3 暗褐色土 粘質弱い、しまりやや強い
ところどころに黄褐色土・赤褐色土・赤褐色土チップが若干混じる 陶磁器片が散在する
- 2b. 10YR3/3 暗褐色土 粘質弱い、しまりやや弱い、2aよりしまりがなくややふかふかした土
ところどころに1cm程度の黄褐色土粒・赤褐色土チップが少し混じる 調査区南西側に見られる
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘質弱い、しまりやや弱い
2aよりしまりあり 黄褐色土・赤褐色土チップが一部混じる 北側、東側斜面は色調が濃い
西側斜面の3層土は相対的にやや弱い、土師器を中心とした土器を包含する
4. 10YR3/4 暗褐色土 粘質弱い、しまり強い
2-3層に比べ強い、調査区内の4層ではところどころクラックが発生し3層土の入り込みが見られる
ほぼ混じりなく硬くしまっている。石器・陶文土器片を包含する
5. 7.5YR3/2 黒褐色土 粘質弱い、しまりやや強い
4層よりも少し弱い・帯状(20~30cm)の厚層層
- 6a. 10YR3/3 暗褐色土 粘質やや強い、しまりやや強い
- 6b. 10YR3/3 暗褐色土 粘質やや強い、しまり非常に強い
6aよりも粘質があり硬くしまっている。硬くしまった部分には粒径1mm程度の砂質土が含まれる
ところどころクラックが発生し上層の土の入り込みが見られる
7. 10YR4/6 褐色土 粘質やや強い、しまり弱い
現在調査区内で確認している最下層で軟質ロームである

第15図 全調査区土層断面図及び土層注記

第3節 基本層位

層位の観察は、調査区内に残存する浄化槽の影響を受けていない東壁・南壁・北壁で行い、遺構・遺物を確認した面から、以下、無遺物層と思われる層については、北側に設置したトレンチで観察している。

(第16図)

1層：(暗褐色砂質土)

表土及び、近現代の造成土で、現地表面から1.7m(標高26.2m)付近まで削平されているため、健軍駐屯地設置以前の施設建築に伴う整地層であると考えられる。調査区内に現存していた浄化槽とそれに伴う配管片、その他陶磁器片が散在している。

2層：(暗褐色土)

1層の掘削により、大部分を消失している可能性が高いが、標高26.4mから0.2～0.4m程の厚みで残存している。陶磁器片を包含する。

3層：(黒褐色土)

標高25.8m付近から遺構を確認し、土師器・石器、陶磁器片を包含する。1層の掘削の影響で部分的に消失。

4層：(暗褐色土)

4層全面にクラックが存在し、細かい溝が形成されている。
4層上面(標高25.5m付近)で黒曜石・縄文土器片を包含する。

5層：(黒褐色土)

標高約25.4mから0.2m程度の厚みを持ち帯状に堆積している。遺物・遺構は確認していない。

6a層：(暗褐色土)

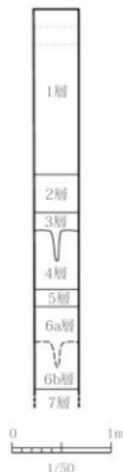
遺物・遺構共に確認していない。

6b層：(暗褐色土)

6a層と比較し、色調等に大差はないが、6b層には砂質の土が混じり、かなり硬く締まっている。また、クラックが形成されており、6a層の比較的やわらかい土が所々入り込んでいる。遺物・遺構は確認していない。

7層：(褐色土)

標高24.4mで第7層上面が露出する。遺物・遺構共に確認していない。



第16図 調査区土層柱状図

第4章 調査の成果

第1節 遺構

溝

S D 1 (第17図)

調査区南西側において検出した。B 3・4、C 3・4 グリッドに位置する。重複遺構との新旧は、S K 1、S K 7 に壊される。ほぼ南北方向に伸びる溝で、長さ約 3.2m、幅約 4.6m、検出面からの深さ約 75cm を測る。方位は N - 8° - W である。

発掘の際、西側を半載しその後、東側を層位ごとに掘り下げていった。埋 4 層上面で硬化面とは言い難いがややしまる範囲と、円形のブロック状の塊が出土した。道路としての使用とは言い切れない。

埋土中から土師器、須恵器、縄文土器の破片等が出土した。埋 4 層中から瓦質土器の破片が出土したことから中世の遺構と考えられる。

S D 2 (第17図)

調査区中央部東側において検出した。D 2 グリッドに位置する。東西に伸びる溝で長さ約 4.8m、幅 27 ~ 46cm、検出面からの深さはごく浅い。方位は N - 90° - E である。

検出の際に、周辺部とともに何度か清掃をしていくなかで、遺構の深度が浅くなってしまったため、埋土の記録は取れていない。埋土は黒褐色土で、4 層土と見分けがつきにくかったが、清掃時、やや黒く、光の反射がややあったため、遺構と認識した。遺物は土師器の破片が出土した。

土坑

S K 1 (第18図)

調査区南西側において検出した。B 3・C 3 グリッドに位置する。S D 1 埋 1 層上面での検出である。重複遺構との新旧は S D 1、S K 7 を壊す。平面形はほぼ円形を呈し、径約 110cm、検出面からの深さ約 54cm を測る。

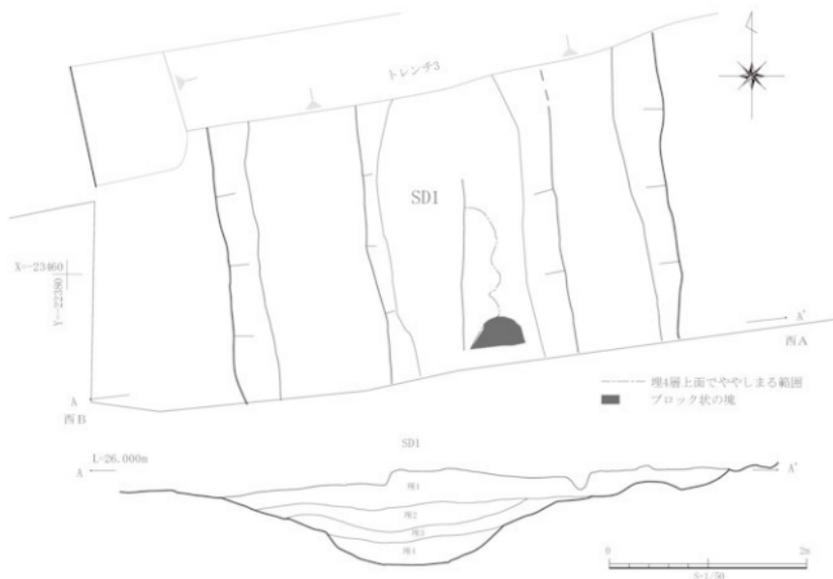
検出時、S D 1 埋 1 層上面に黄褐色の円形のラインが見られた。北側はカクランに壊されていたため、そのカクランをトレンチとして断面を観察すると、埋土は黒褐色土で底部に焼土層と思われる褐色の層が残存するため、焼土坑ではないかと考え調査した。しかし埋土中には炭化物や焼土等は含まれていなかった。焼土坑ではないようである。

S K 7 (第18図)

調査区南西側において検出した。B 3・C 3 グリッドに位置する。前述の S K 1 カクラントレンチの断面から、S K 1 の下に S D 1 を壊す土坑を確認した。S K 1 と同一の土坑かと考えたが、同一のものとする S K 1 の埋 1 層は黒褐色土で混じりは少なく、埋 2 層褐色土を境に下層は極暗褐色土中に褐色土を多く含むことから、元々 S K 7 が掘られ、埋まった後、上部はほぼ同じ大きさで S K 1 を掘りなおしたと考え、別遺構とした。上端は S K 1 掘り方面では側面まで極暗褐色土に褐色土が多く混じった土であり、S K 7 の掘り込みが確認できなかったことから、S K 7 の上端は、ほぼ S K 1 と同一と思われる。

平面形はほぼ円形を呈し、径約 110cm、検出面からの深さ約 86cm を測る。

埋土には暗褐色土、黒褐色土に褐色土の混ざり、ブロックが多く入っているが、炭化物や焼土等は含まれていなかったため焼土坑ではないようである。



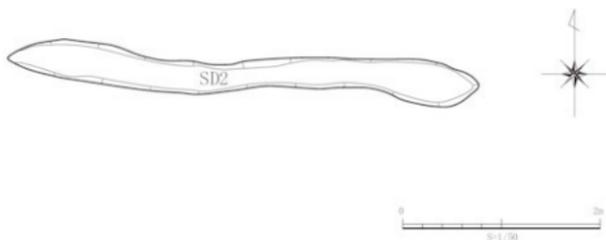
SD1

現1. 10YR2/3 黒褐色 砂質土 粘質弱い しまりやや強い
下の塚土と比べるとしまりが強い
棟樑ボヤで削るとシャキシャキと音がする感じ
赤褐色～黄褐色の1cm大のブロック、またはチップがやや
多く混じる（面積割合76%）

現3. 7.5YR2/2 黒褐色 砂質土 粘質弱い しまりやや弱い
塚3の黄褐色土・赤褐色土チップが少し混じる

現2. 10YR2/2 黒褐色 砂質土 粘質弱い しまりやや強いが塚1程は強くない
現1と比べると黄褐色の1cm大のブロックまたはチップは入るが、
面1程割合は高くない（3～7%程度）
やや細かい黄褐色の土（10YR4/3）の混じり方が所どころに見られ
そのためか現1よりも暗く見える

現4. 10YR2/2 黒褐色 砂質土 粘質弱い しまり弱い
4層土に近いのか上層よりもやや明るい
黄褐色土チップがほんの少し混じる
下層は4層土との混じりが多くなる そのため分層も考えられたが
大層はないと考え同一層とした

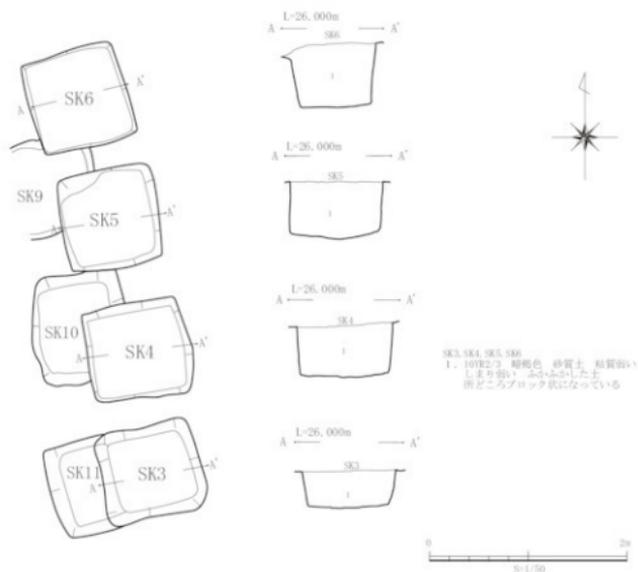


第17図 SD1、SD2平面・断面図

SD1完掘後、写真撮影と実測のため作業を行っている最中に、長時間の雨が降り、北側浄化槽の配管から大量の漏水があった。漏水はちょうどSD1西側端から漏れている状況であったが、様子を見てみると、その水はSD1底部から下へ浸み込むことはなく、底部に広がりがながら、傾きをつたって北側のカクランへと落ちて溜まっていた。ちょうど水の広がる範囲は、ほぼSK2上端と合致していたことから、水が流れることで土中の鉄分と反応し土の硬化が起き、その硬化の範囲をSK2としていたのではないかとの考えに至った。

SK3・4・5・6・8・9・10・11 (第14・19図)

調査区中央部付近において検出した。浄化槽側コンクリート壁に沿うように残存する。平面形は方形で、一辺90～110cm、検出面からの深さ約38～60cmを測る。SK9～11が古く、SK3～6に壊される。どの遺構も埋土は暗褐色土でしまりが弱くふかふかした土である。埋土中に近世から近代の陶磁器の破片を含むことから、近代の土坑と思われる。SK8は、断面図の記録を漏らしたが、SK3～6の埋土と同様である。SK3～6とほぼ一列に並ぶことから同時期のものと思われる。



第19図 SK3・4・5・6・8・9・10・11平面・断面図

第2節 遺物

1. 遺構内

遺構内から出土した遺物は全体形が復元できる資料は認められない。また、S D 1から出土した。縄文土器は流れ込みの遺物であり、遺構に伴うものではない。S D 1埋1層から縄文土器鉢の口縁部(第20図1)、埋2層から土師器灯明皿(第20図3)、埋3層から縄文土器胴部(第20図2)が出土した。20-1は外傾し内外面に条痕文を施される。20-3は底部が厚い。20-2は外面に沈線が施される。S K 6埋土中から土製品の人面(第20図4)が出土した。

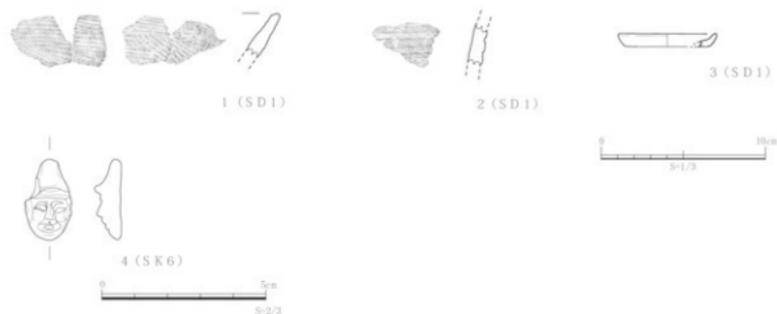
2. 遺構外

遺構外からは縄文土器、石器の出土が多い。番号の後がNo.の場合は、「第21図調査区遺物点上げ分布図」のNo.に対応する。グリッド名の場合は、遺物が出土したグリッドを表す。

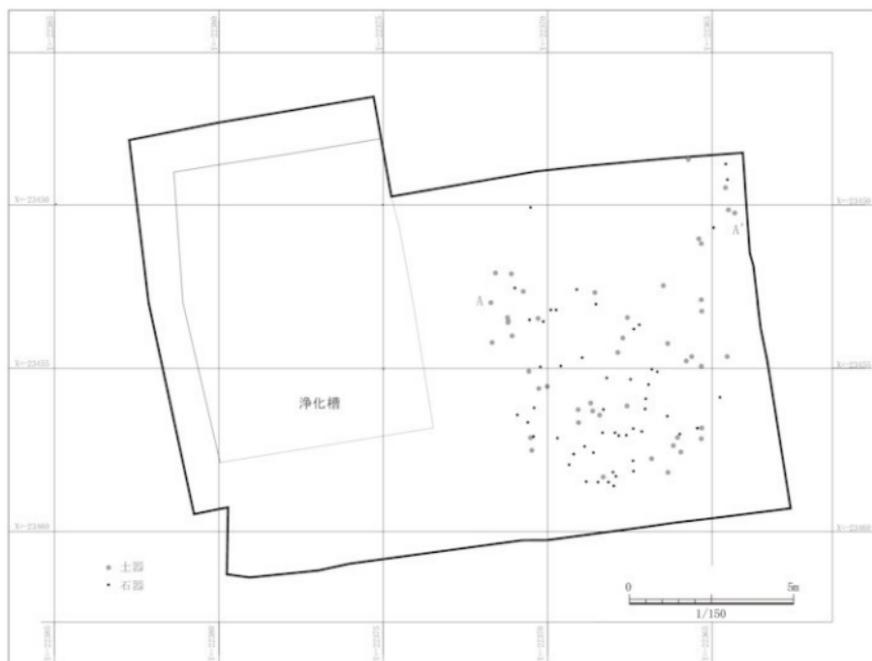
縄文土器

第22図1~6は点上げた遺物である。22-1・2は深鉢である。口縁部はやや外傾し、内外面に条痕文が施され、口唇部には刻みがある。22-3は鉢である。内外面の施文、口唇部の刻みは22-1・2と同様であるが、口縁部が内傾する。22-4は鉢である。口縁部は内傾し、外面に沈線が施される。22-5は鉢の胴部から底部である。内外面にミガキが入る。底部は平底で開き気味に胴部へ伸びる。22-6は浅鉢である。胴部は緩やかに内湾する。口縁部下で小さなクランク状に折れ、口縁部の立ち上がりは外開きである。口縁部内面に浅い沈線を持つ。内外面ともにミガキ調整される。

第25図1~3はグリッド上げた遺物である。25-1は深鉢の口縁部で直口し、内外面に条痕文、口唇部に刻みが施される。この土器には補修孔がある。25-2は鉢の口縁部で内外面に条痕文が施され、やや外傾する。25-3は浅鉢の頸部から胴部で「く」の字形に屈折する。外面はミガキ調整される。

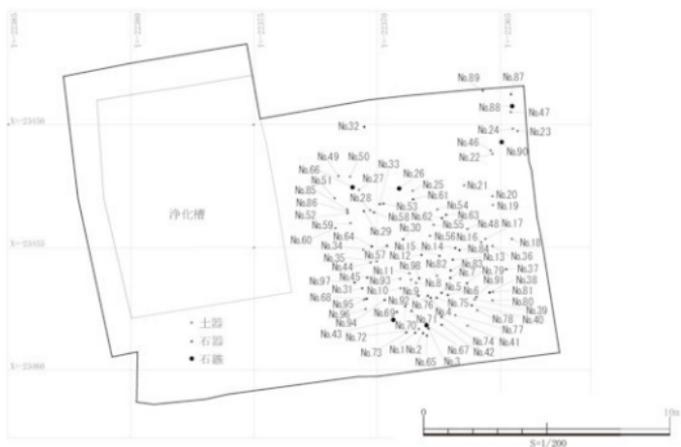


第20図 遺構内出土遺物実測図

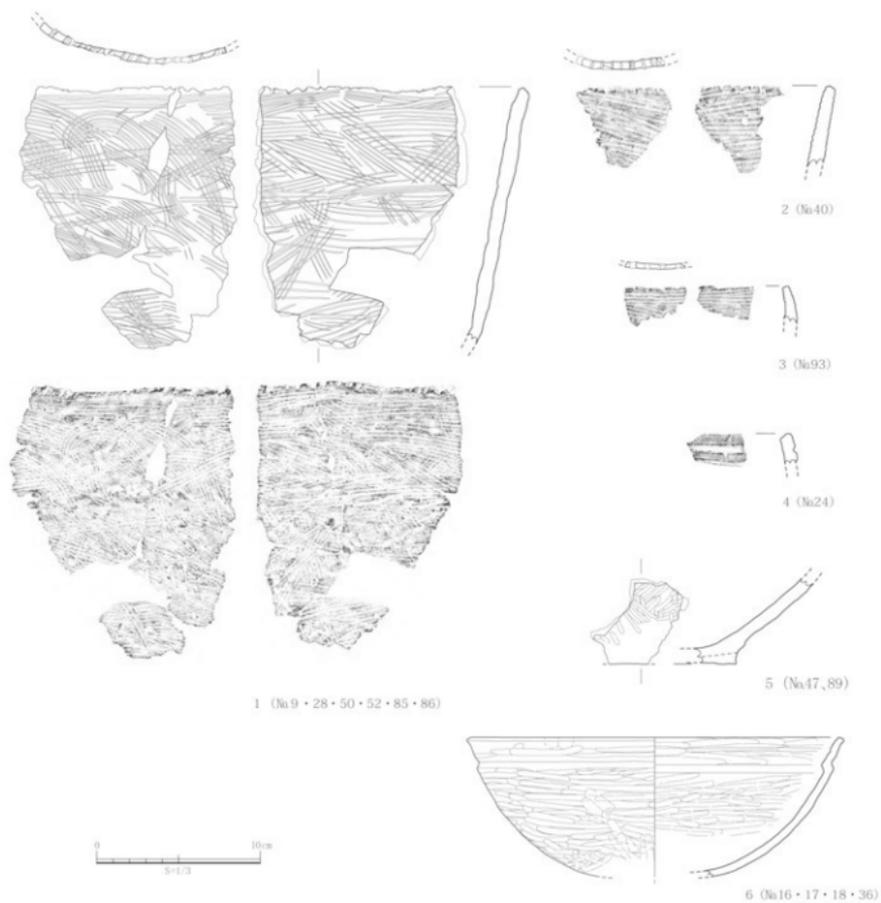


A A'

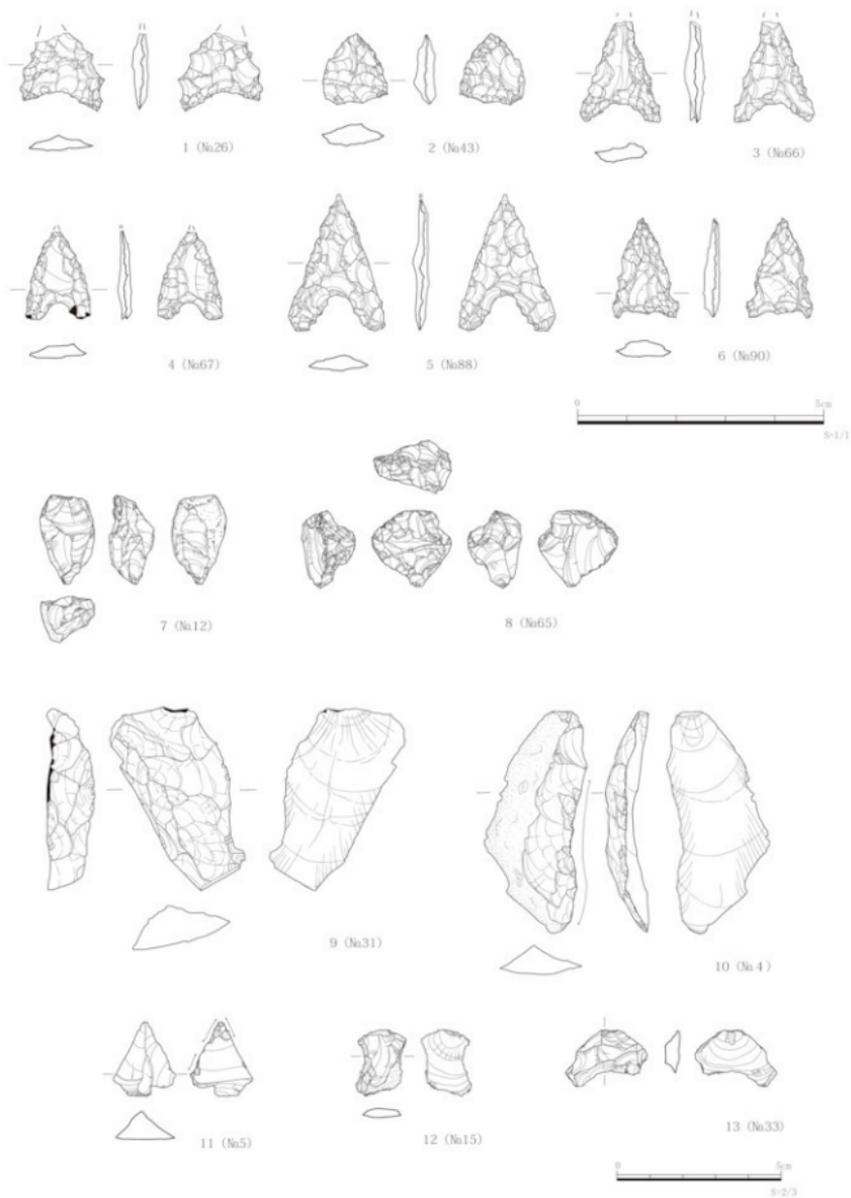
L=25,900m
L=25,600m



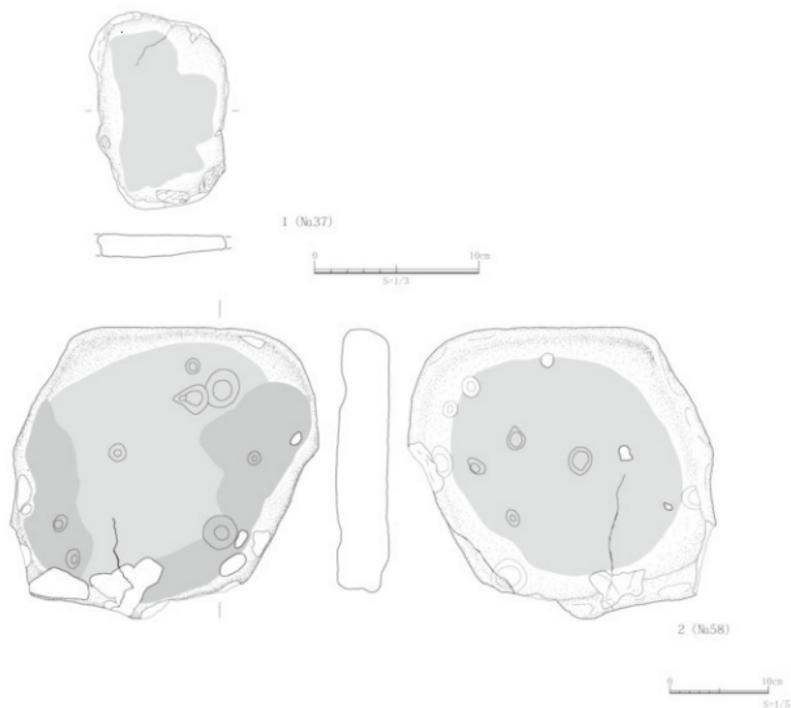
第21図 調査区遺物全点上げ分布図



第22図 調査区内出土土器実測図



第23図 調査区内出土石器実測図1

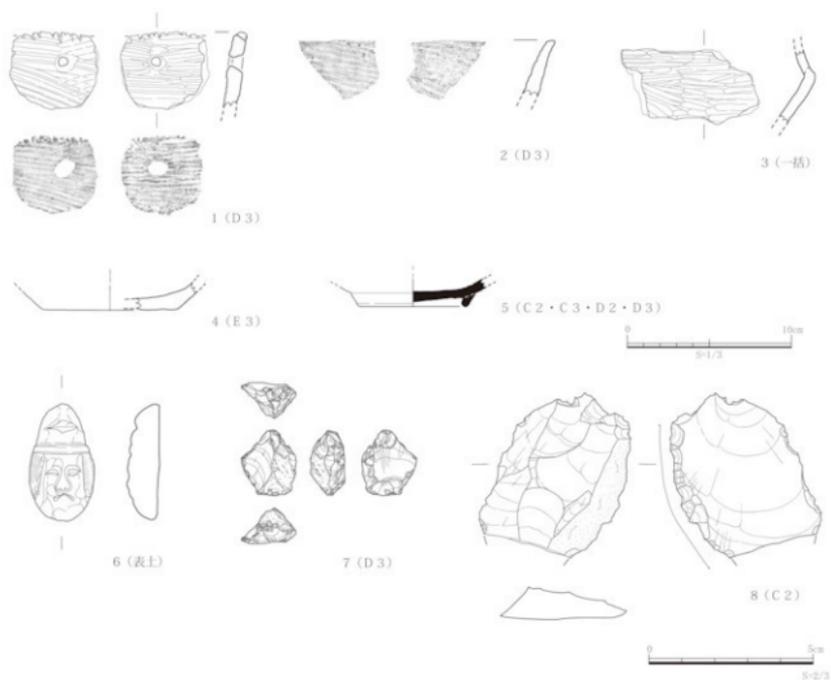


第24図 調査区内出土石器実測図2

石器

第23図1～6は石礫である。23-1は凹基礫で先端が欠損している。基部の抉りは浅い。石材は黒曜石。23-2はやや五角形の平基礫で縁部に調整が入る。やや厚い。石材は黒曜石。23-3は凹基礫で先端が欠損している。基部の抉りはやや浅い。縁部に調整が多く入る。石材は安山岩。23-4は凹基礫で先端が欠損している。基部の抉りはやや深い。石材は安山岩。23-5は凹基礫で先端が欠損している。基部の抉りは深く作りも丁寧に仕上げている。石材は安山岩。23-6は平基礫でやや厚みがある。調整はやや少ない。石材は安山岩。

第23図7・8、第25図7は楔形石器である。石材は3点とも黒曜石。第23図9は二次加工剥片、第23図10～13、第25図8は使用痕が残る剥片である。石材は、23-9・10、25-8は安山岩、23-11はチャート、22-12・13は黒曜石。第24図1は石皿で中央平面部が擦れている。第24図2は台石で裏表面とともに中央部が擦れている。特に表面では中央部から左右にややずれた範囲(トーンが濃い範囲)で特に擦れてツルツルの状態である。



第25図 調査区グリッド内出土遺物実測図

土師器・須恵器・土製品

第25図4は土師器杯の底部である。底部に糸切痕が見られる。第25図5は須恵器椀の底部である。高台が内側向きに付く。第25図6は土人形の頭部である。

出土遺物観察表①

第4表 出土遺物観察表

探検 区名	種別	数量	出土地点		位置 (cm)		構成	形状			色調		備考	写真 図版		
			番号	階位	面	底		口径	底径後	高さ	厚	内径			外径	内面
第20区	1 縄文土器 鉢	SD1	埋土層			(27)	1/4以下	良好	桑色文、ナ子	—	—	に染み縷 5YR6/4	灰褐色 3.5YR5/2	内外面、スス付着	図5	
第20区	2 縄文土器 鉢	SD1	3階			(27)	1/4以下	良好	漆縷、ナ子	—	—	に染み縷縷 2.5YR6/4	灰黄縷 10YR5/2	—	図5	
第20区	3 土師器 打ね盆 ¹⁾	SD1	埋土層			(54)	0.8	1/4以下	良好	面転ナ子	面転ナ子	縷 3.5YR7/6	縷 3.5YR7/6	—	図7	
第20区	4 土製品 八咫	S96	4階土層			全長 1.4	0.8	浮小 窪は窪部	良好	面転ナ子、指頭正直	面転ナ子	に染み縷 3.5YR6/4	に染み縷 3.5YR6/4	—	図7	
第22区	1 縄文土器 鉢	O-2区				(162)	1/4以下	良好	桑色文	—	—	に染み縷 3.5YR6/3	に染み縷 3.5YR6/4	口縁部、斜め目あり 外面、スス付着	図5	
第22区	2 縄文土器 鉢	O-2区				—	—	—	—	—	—	縷 2.5YR6/6 面転縷 3YR5/6	縷 3YR6/6	口縁部、斜め目あり	図5	
第22区	3 縄文土器 鉢	D-2区				(23)	1/4以下	良好	桑色文	—	—	縷 5YR6/6 に染み縷 3.5YR6/4	縷 3YR6/6	口縁部、斜め目あり	図5	
第22区	4 縄文土器 鉢	D-2区				(13)	1/4以下	良好	ナ子、3が牛	—	—	に染み縷 3.5YR7/4	に染み縷 3.5YR6/4	—	図5	
第22区	5 縄文土器 鉢	D-1区				(53)	1/4以下	良好	ナ子、3が牛	ナ子、3が牛	ナ子、3が牛	に染み縷 3.5YR6/4	に染み縷 3.5YR6/4	—	図5	
第22区	6 縄文土器 鉢	D-2区				(22)	—	(0.6)	1/4	良好	3が牛	3が牛	に染み縷縷 10YR7/3	灰黄縷 10YR6/2	外面、スス付着	図5
第23区	1 石器 打ね石縷 D-2区					全長 (1.0)	1.7	0.4	—	—	—	—	—	重さ 0.72g	図6	
第23区	2 石器 打ね石縷 D-2区					全長 (2.1)	1.7	0.4	—	—	—	—	—	重さ 0.73g	図6	
第23区	3 石器 打ね石縷					全長 (1.0)	1.3	0.3	—	—	—	—	—	重さ 0.64g	図6	
第23区	4 石器 打ね石縷					全長 (2.1)	2.0	0.4	—	—	—	—	—	重さ 0.69g	図6	
第23区	5 石器 打ね石縷 E-1区					全長 (1.0)	1.4	0.4	—	—	—	—	—	重さ 1.14g	図6	
第23区	6 石器 打ね石縷 E-2区					全長 (1.0)	1.4	0.4	—	—	—	—	—	重さ 0.76g	図6	
第23区	7 石器 打ね石縷 D-2区					全長 (2.8)	1.7	1.4	—	—	—	—	—	重さ 5.63g	図6	
第23区	8 石器 打ね石縷 D-2区					全長 (2.4)	1.7	1.1	—	—	—	—	—	重さ 6.53g	図6	
第23区	9 石器 二次加工 削片	O-2区				全長 (3.1)	4.2	1.3	—	—	—	—	—	重さ 26.20g	図6	
第23区	10 石器 削片	O-2区				全長 (0.8)	0.8	0.2	—	—	—	—	—	重さ 15.51g	図6	

出土遺物観察表②

図号 番号	種類 類別	出土地点			位置 (cm)			残存率	状況	調整				備考	写真 図説		
		区	層位	掘り上り 層	口徑	底部径	高さ			外縁面	内縁面	外面	内面			色澤	
第21図 11	石器 磨石 削片	D-3区	4層上面	Nk.5	全長 2.9	全幅 1.9	厚み 0.9	—	—	—	—	—	—	—	重量: 2.27g	図6	
第21図 12	石器 磨石 削片	D-3区	4層上面	Nk.15	全長 2.0	全幅 1.5	厚み 0.3	—	—	—	—	—	—	—	重量: 1.31g	図6	
第21図 13	石器 磨石 削片	D-2区	4層上面	Nk.33	全長 3.8	全幅 2.5	厚み 0.5	—	—	—	—	—	—	—	重量: 1.28g	図6	
第21図 1	石器 砥石	E-3区	4層上面	Nk.37	全長 10.2	全幅 10.4	厚み 1.9	磨り痕	—	—	—	—	—	—	重量: 570g	図7	
第21図 2	石器 台石		4層上面	Nk.38	全長 29.8	全幅 31.2	厚み 5.2	磨り痕、磨り痕	—	—	—	—	—	—	重量: 6.05kg	図7	
第21図 1	縄文土器 深鉢	D-3区	4層上面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部、部分のみあり	図5	
第21図 2	縄文土器 鉢	D-3区	4層上面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	明部縁 31705.6	図5	
第21図 3	縄文土器 深鉢		一括	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	明部縁 31705.6	図5	
第21図 4	土器 鉢	E-3区	3層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	重量: 2.572	図5	
第21図 5	土器 鉢	C-2.3 D-2.3	3層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	重量: 5177.6	図7	
第21図 6	土製品 人形		表土	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内底、自然剥付層 貼付部位	図7
第21図 7	石器 磨石 削片	D-3区	4層上面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	重量: 2.96g	図6	
第21図 8	石器 削片	C-2区	4層上面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	重量: 26.2g	図6	

第5章 まとめ

今回の調査では、遺物について、溝2条と土坑10基を検出している。土坑については、SK3・4・5・6・9・10・11については近代の土坑と思われる。SK1・7についてはSD1埋没後に掘られたもののため、溝の出土遺物から中世以降の土坑と考えられる。

SK1底部の焼土のような褐色土、SK7の暗褐色埋土中の褐色土については、浄化槽の配管の漏水の影響による錆等の沈着の可能性、または接しているカクラン内に埋まっていたものの影響が考えられる。錆等の沈着については、SK7の位置が漏水箇所から離れているため、SK7埋土のみに褐色の沈着が見られるのは、掘られた土であるので、SD1埋土よりも柔らかく、浸透しやすかったためであろうか。カクラン内に砂、小石、ブロック片、赤褐色の瓦片、赤褐色土が入っていて、漏水により色素がSK7土坑埋土に色移りしたのであろうか。カクラン内に立っていたコンクリート柱も褐色に色移りしている。しかし、なぜ他の土には色移りせず、SK7埋土のみに色移りするのでしょうか、どちらにしても疑問が残る。

溝について、SD1は、底部の埋土中から瓦質土器が出土したことから、中世の溝と思われる。SD2は、掘り込みが浅く、遺物も擦れた土師器片のため、明確な時期を特定できない。

遺物については黒川式と思われる浅鉢と条痕文が入る深鉢や浅鉢、石鏃等、縄文時代後・晩期と考えられる遺物が出土している。

近隣の過去の調査地点の成果を見る。

本調査区から北側へ250m程離れた健軍藤原遺跡では遺構、遺物ともに様相が異なる。古代以前の遺構として円形周溝遺跡、掘立柱遺構、古代・中世の遺構として掘立柱建物遺構、溝状遺構、土坑が出土する。共通する溝状遺構、健軍神社周辺遺跡群SD1と健軍藤原遺跡S06・S08・S09では、方位、規模ともに異なる。遺物は土師器、陶磁器、縄文土器に加え弥生土器が出土する。また、予備調査時に旧石器時代の緑泥片岩の剥片が出土している。

本調査区の南西部、健軍神社周辺遺跡群内の健軍上ノ原遺跡では、本調査区から南西側へ300m程離れた熊本市第2・3次調査区で、中世の可能性が高い6本の道路跡が検出されている。掘り込みを持たない



第26図 周辺調査地点図

道路跡と浅い掘り込みを持つ道路跡で、幅 30 ～ 40cm程の硬化面を持つ。他に縄文時代早期（塞ノ神式期）と思われる集石遺構が出土している。遺物は塞ノ神式土器、御領式土器、黒川式土器、打製石鏃等が出土する。

南西側へ350m程離れた熊本市第19次調査区では土坑1基、小穴3基が検出されている。遺物は縄文後期末～晩期前半の土器片で、多くは天城2式～古閑2式に比定されるものが出土している。

健軍上ノ原遺跡中の南側の熊本市第7次調査区では後・晩期の柱穴・土坑と祭祀遺物、第10次調査区では埋設土器・柱穴群、第11次調査区では埋設土器・集石遺構・柱穴、第12次調査区では土坑状の遺構・柱穴が検出されている。第2・3・6・17次調査区からは遺構が検出されていないことから、健軍上ノ原遺跡の主体は第7・10・11・12次調査区が含まれる推定範囲南側の直径200m～300m程度であり、縄文後晩期の遺物は出土しても、遺構が検出されない第2次・第3次・第6次・第17次調査区が含まれる北側は、遺物の2次堆積域、縄文時代後晩期集落の外縁部に相当するものと考えられている。（網田2004）

本調査区は熊本市調査第2・3・6・17区と同様に、縄文時代後・晩期の遺構は検出できなかったが、遺物は上述の通り、黒川式土器の精製浅鉢と粗製鉢、石鏃等が出土した。このことから遺跡推定範囲（第26図）より東側は削平により消失しているとされている健軍上ノ原遺跡は、北東方向への広がりが認められ、本調査区は遺物の2次堆積域であるといえよう。

なお、健軍藤原遺跡で出土した旧石器時代資料の有無については、トレンチ確認を行ったが、遺物・遺構は認められなかった。

この遺跡の調査では、この周辺の様相を明らかにするまでは至らなかったが、縄文・中世・近代と、この地での人々の生活の跡を垣間見ることができた。前述のとおり疑問点も多く残った。今後の調査により、この地の様相が解き明かされることを期待したい。

参考文献

- 網田龍生 2004 「健軍神社周辺遺跡群第2次調査区」「健軍神社周辺遺跡群第3次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成15年度—』熊本市教育委員会
- 大城康雄 1999 「健軍神社周辺遺跡群第6次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教育委員会
- 金田一精 1999 「健軍神社周辺遺跡群第7次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教育委員会
- 赤星雄一 1999 「健軍神社周辺遺跡群第9次調査区」「健軍神社周辺遺跡群第10次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教育委員会
- 山下宗親 1999 「健軍神社周辺遺跡群第11次調査区」『年報 第2号—平成4年度～平成8年度—』熊本市教育委員会
- 原田範昭 2000 「健軍神社周辺遺跡群第12次調査区」『年報 第3号—平成9年度～平成10年度—』熊本市教育委員会
- 美濃口正朗 2005 「健軍神社周辺遺跡群第17次調査区」『年報 第7号—平成15年度—』熊本市教育委員会
- 美濃口正朗 2008 「健軍神社周辺遺跡群第19次調査区」『報告集—平成19年度—』熊本市教育委員会
- 美濃口正朗 2012 「健軍神社周辺遺跡群第20次調査区」『熊本市の文化財 第12集 熊本市文化財発掘調査報告集—平成23年度—』熊本市教育委員会
- 大川清・鈴木公徳・工業善通編 1996 「日本土器事典」雄山閣
- 坂口圭太郎 2005 「健軍藤原遺跡」熊本市文化財調査報告第229集 熊本市教育委員会

写真図版



調査区完掘状況



SD1 完掘状況



SD2 完掘状況



SK1 完掘状況



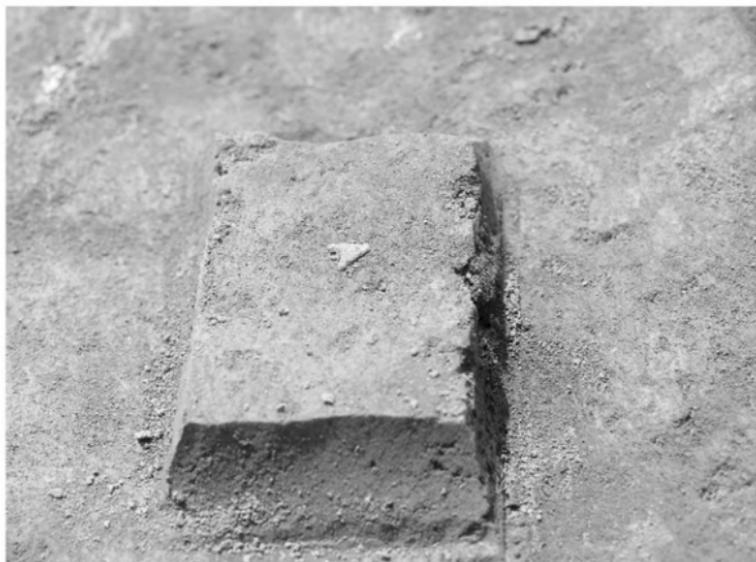
SK7 完掘状況



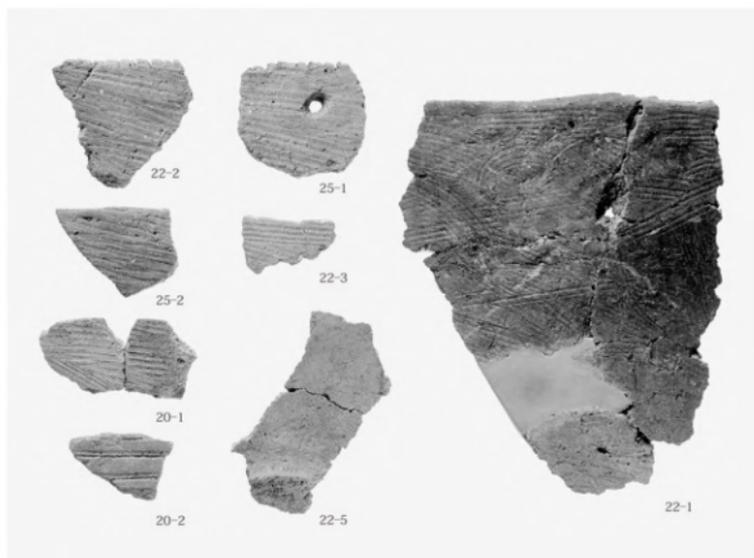
調査区東側土層断面



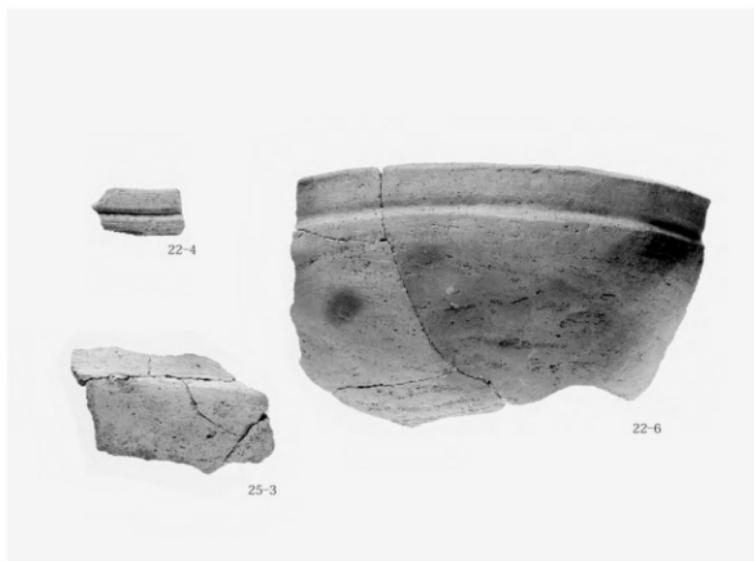
縄文土器出土状況



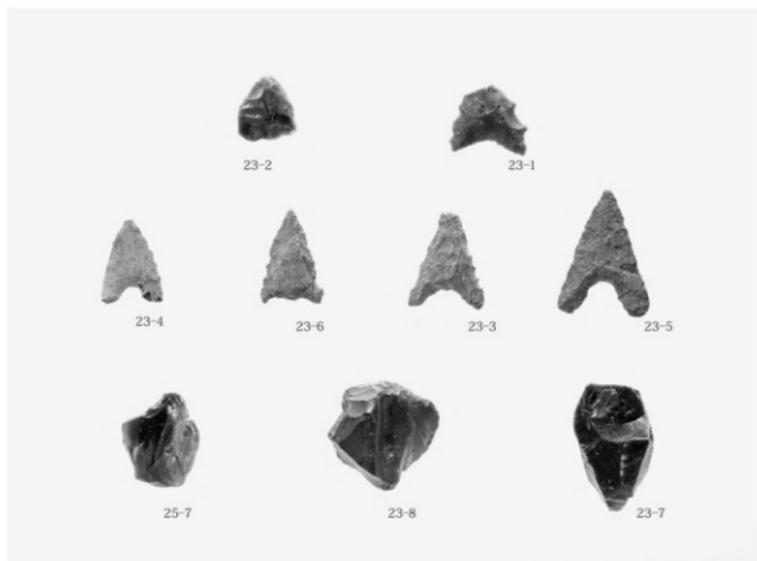
石器出土状況



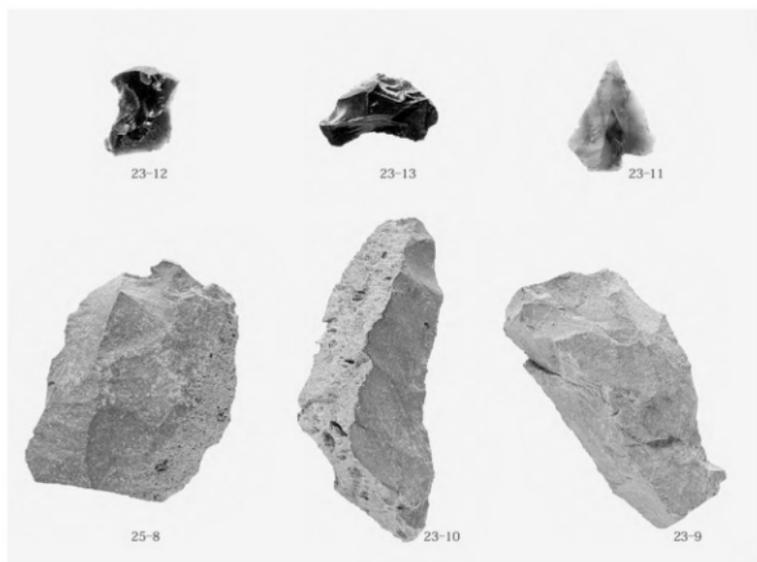
縄文土器 (1)



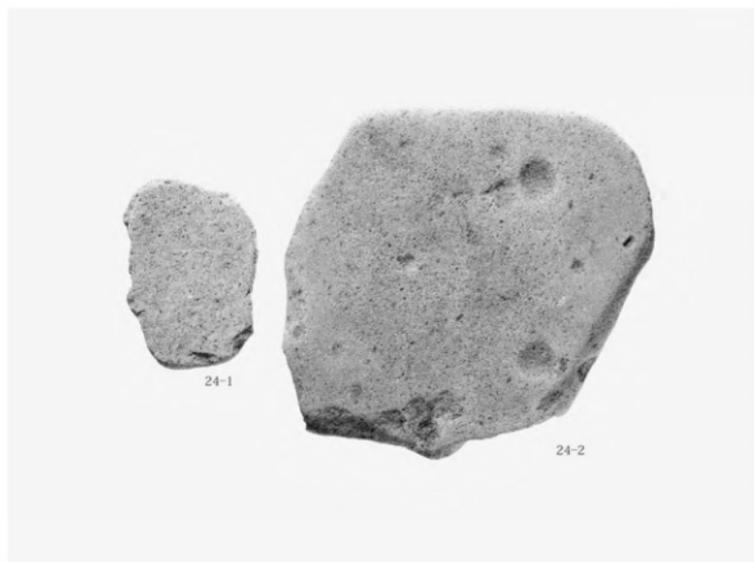
縄文土器 (2)



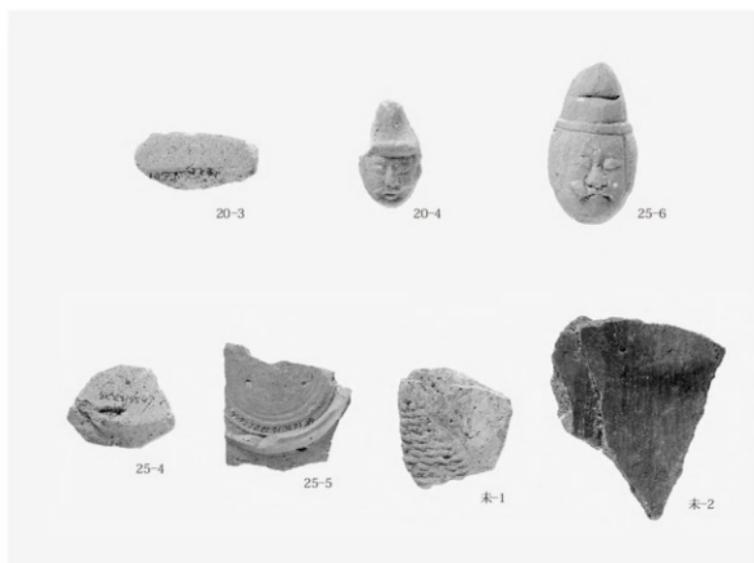
出土石器（石鏃・楔）



出土石器（二次加工・剥片）



出土石器 (石皿)



古代出土遺物

あとがき

平成 26 年度に熊本県教育委員会が陸上自衛隊健康軍駐屯地内発電機室及び地下燃料タンク新設に伴う埋蔵文化財調査を行った健康神社周辺遺跡の報告書が完成しました。

平成 26 年夏の発掘調査では、天候不順で雨のため作業が中断したり、小雨の中で作業を行ったりすることも多くありました。また、天気がいい日も、駐屯地内で熱中症警戒レベル（嚴重警戒レベルの際には休憩しました）の放送が流れる中、発掘作業を行っていることもありました。

現場が 9 月 1 週目に終わり、それから整理作業を始め、26 年度中に報告書に取りまとめることができたのは、ひとえに発掘作業と整理作業に携わった多くの方々の方力によるものです。

この報告書が地元の方々並びに県民の皆様の文化財に対する認識と理解をより深めることになるよう希望いたします。

発掘調査時、整理報告書作成時と陸上自衛隊健康軍駐屯地の皆様、熊本市教育委員会の皆様をはじめ、たいへん多くの方にご指導、ご協力をいただきました。おかげで調査から報告書の作成まで行うことができました。本当にありがとうございます。

最後に、本文中で触れることができなかった実際の作業に携わられた方々の名前を記し、感謝の意を表します。（敬称略・五十音順）

発掘調査

井上貴輝 大塚昇 奥村龍則 鈴木健功 高本正子 中村保 峯元幸 山本緑

整理報告書作成

清田幸恵 坂本貴美子 立石美代子 永山邦子 橋本英子 溝口健造 結城あけみ

報告書抄録

ふりがな	けんぐんじんじやしゅうへんいせきぐん							
書名	健軍神社周辺遺跡群							
副書名								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第316集							
編著者名	水上正孝・前田佳代子・高瀬美智代							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号 〒096-383-1111(代)							
発行年月日	2015年3月31日							
資料の保管場所	熊本県文化財資料室 〒861-4215熊本県熊本市南区城南町沈目1677 TEL.0964-28-4933							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
けんぐんじんじやしゅうへん 健軍神社周辺 いせきぐん 遺跡群	けんぐんじんじやしゅうへん 熊本県熊本市 東区東町 1-1-1	201	357	32° 78° 82°	130° 76° 11°	2014年 7月14日～ 9月5日	約221㎡	駐屯地内 発電機室及 び地下燃料 タンク新設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
健軍神社周辺 遺跡群		縄文・中世		土坑 溝状遺構		縄文土器・石器 土師器・須恵器		
要約	健軍神社周辺遺跡群は、名称の異なる複数の遺跡をまとめたもので、庄口川東側には健軍上ノ原遺跡、西側には健軍神社遺跡・鳥居原遺跡、庄口川谷部の西斜面にはミョウゲンジ遺跡が存在する。今回の調査区は、陸上自衛隊健軍駐屯地内の南西側で発電機室及び地下燃料タンク新設に伴い、平成26年度に熊本県教育委員会が発掘調査を実施した。遺構としては中世の溝、土坑などが検出された。これらの遺構とは伴わないが、調査区内から縄文時代後期後半から晩期前半の土器・石器が多く出土した。特に黒川式土器の精製浅鉢と粗製鉢、石鎌などが出土することから、当該期健軍上ノ原遺跡の北東方向の広がりが認められ、本調査区は、遺物の2次堆積域であると思われる。							

平成27年3月31日 印刷

平成27年3月31日 発行

健軍神社周辺遺跡群

熊本県文化財調査報告第316集

編集・発行 熊本県教育委員会

〒869-0542 熊本県宇城市松橋町豊崎 1959

印刷 敷島印刷株式会社

発行者：熊本県教育委員会
所 属：教育総務局文化課
発行年度：平成26年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第316集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：健軍神社周辺遺跡群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年9月21日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>